

339

236

5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

始



339

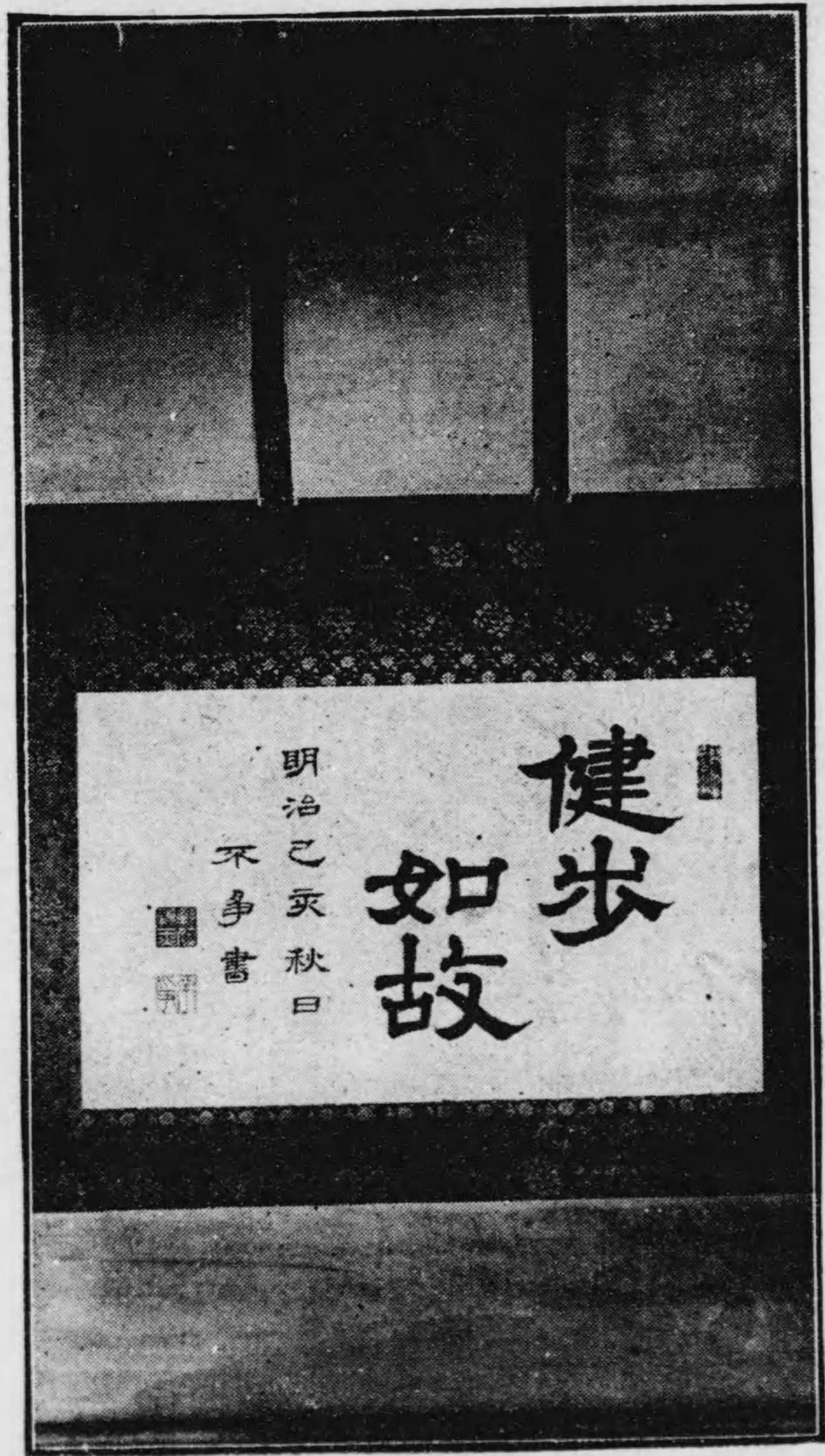
206

道後溫泉誌

永錫無盡

二品大勳位熾仁親王書





健步
如故

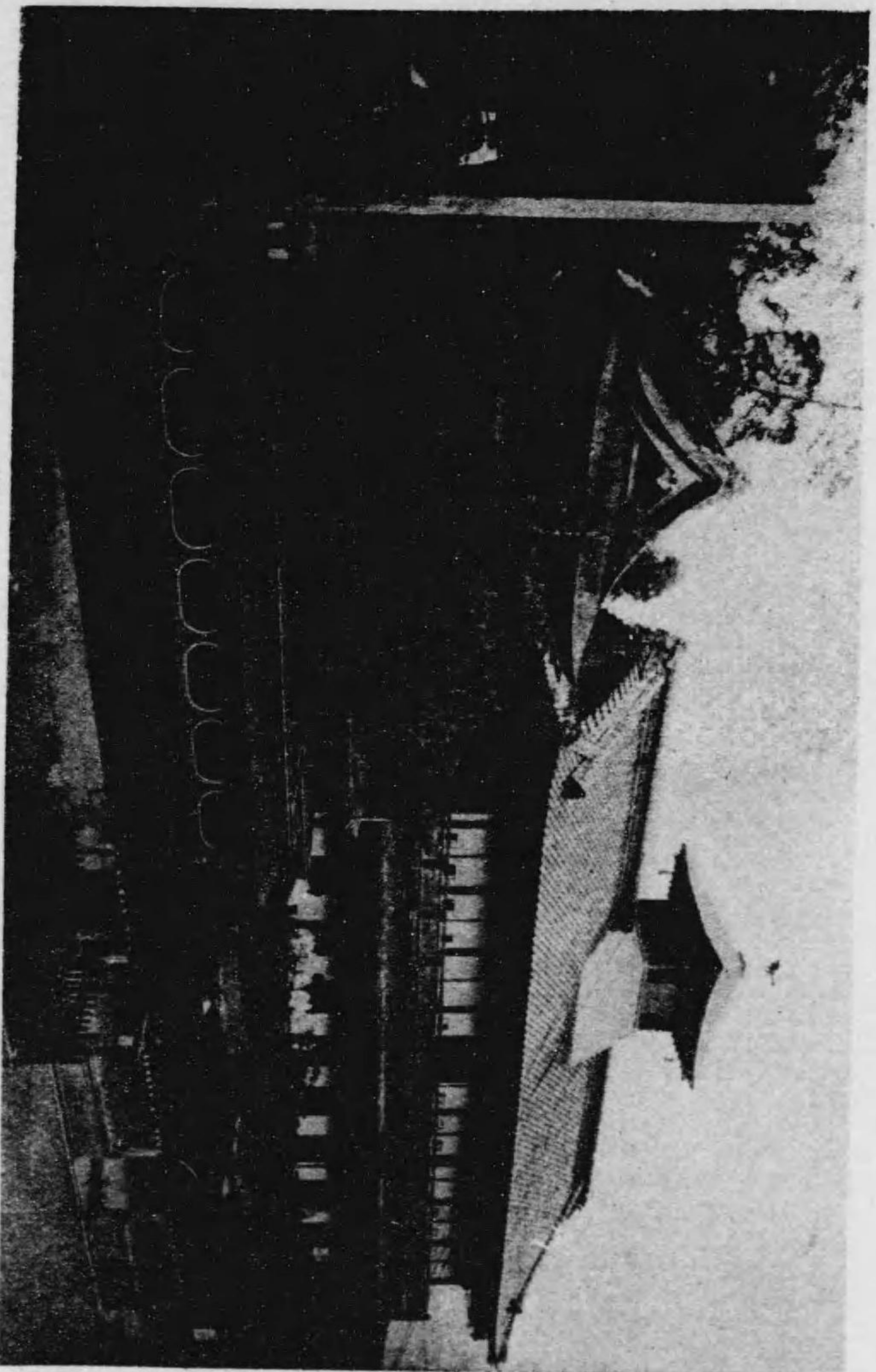
明治己亥秋日
不爭書



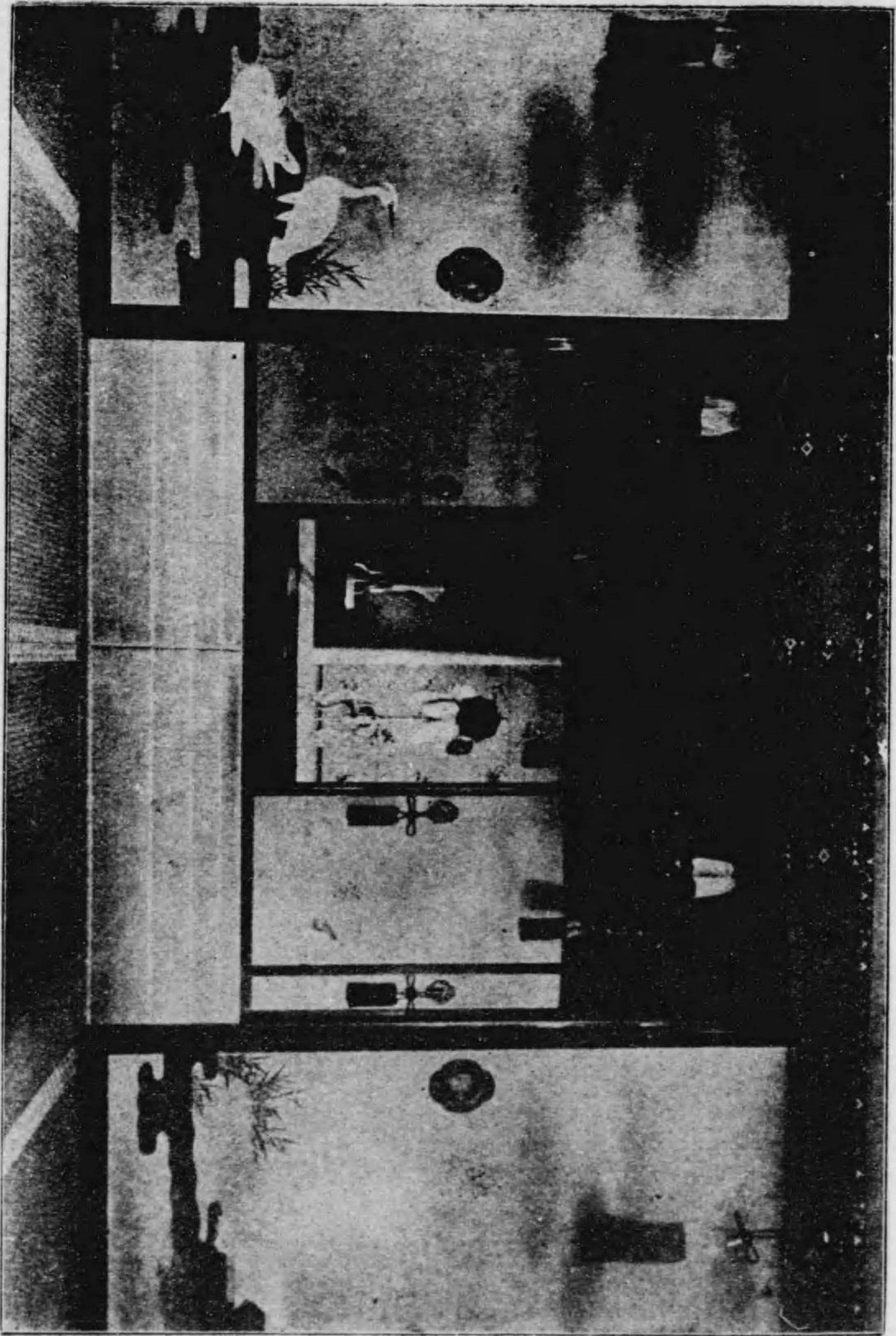
甘
泉
在
病
豎

國傳據

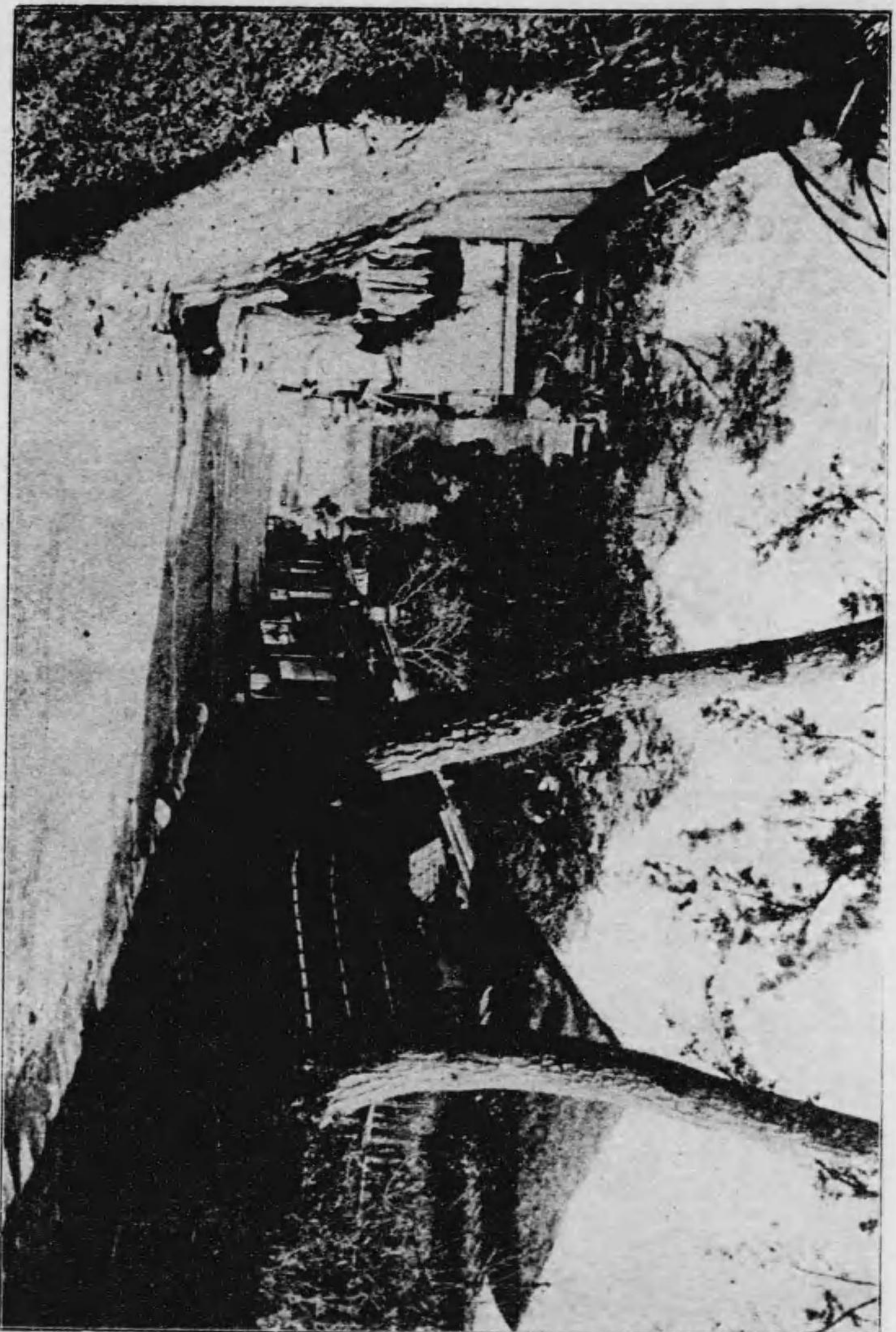




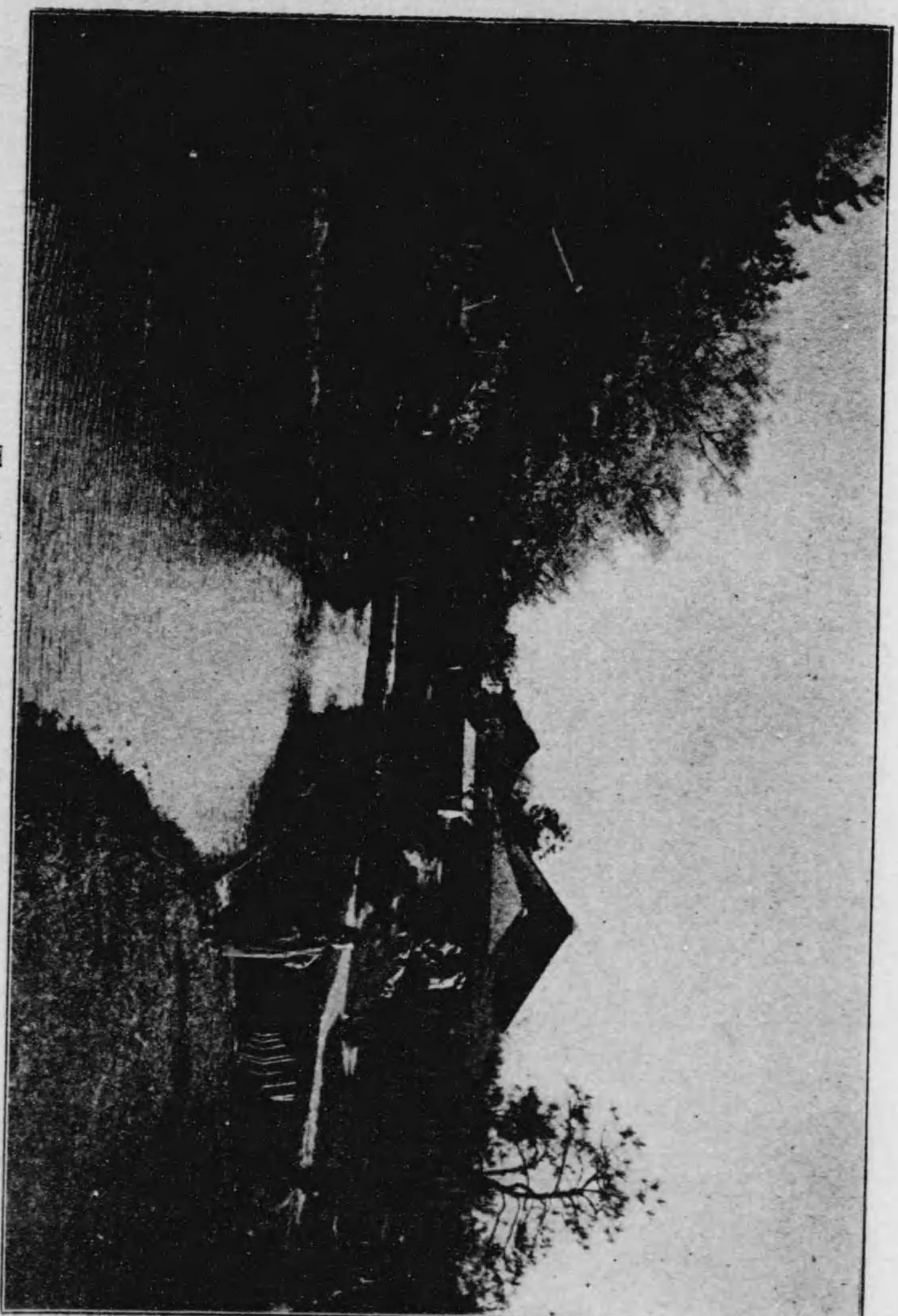
湯ノ神泉温後道豫伊
The hot spring house of Kaminoyu (the spring of god) Digo, Iyo.



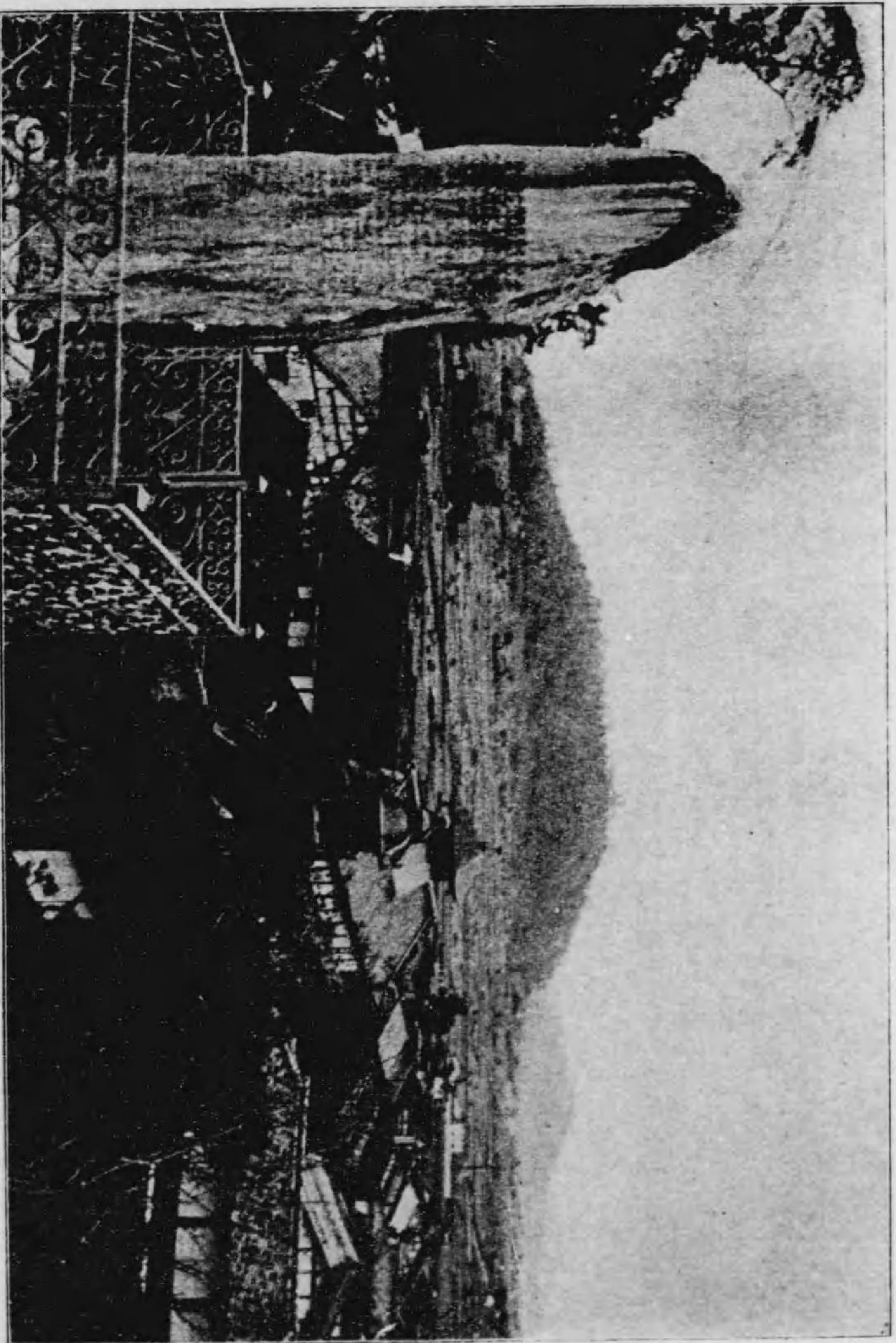
(股新又稱)室御族皇孫在
Yu-shinden, a chamber in the Digo Hot Spring
House for the use of Imperial family.



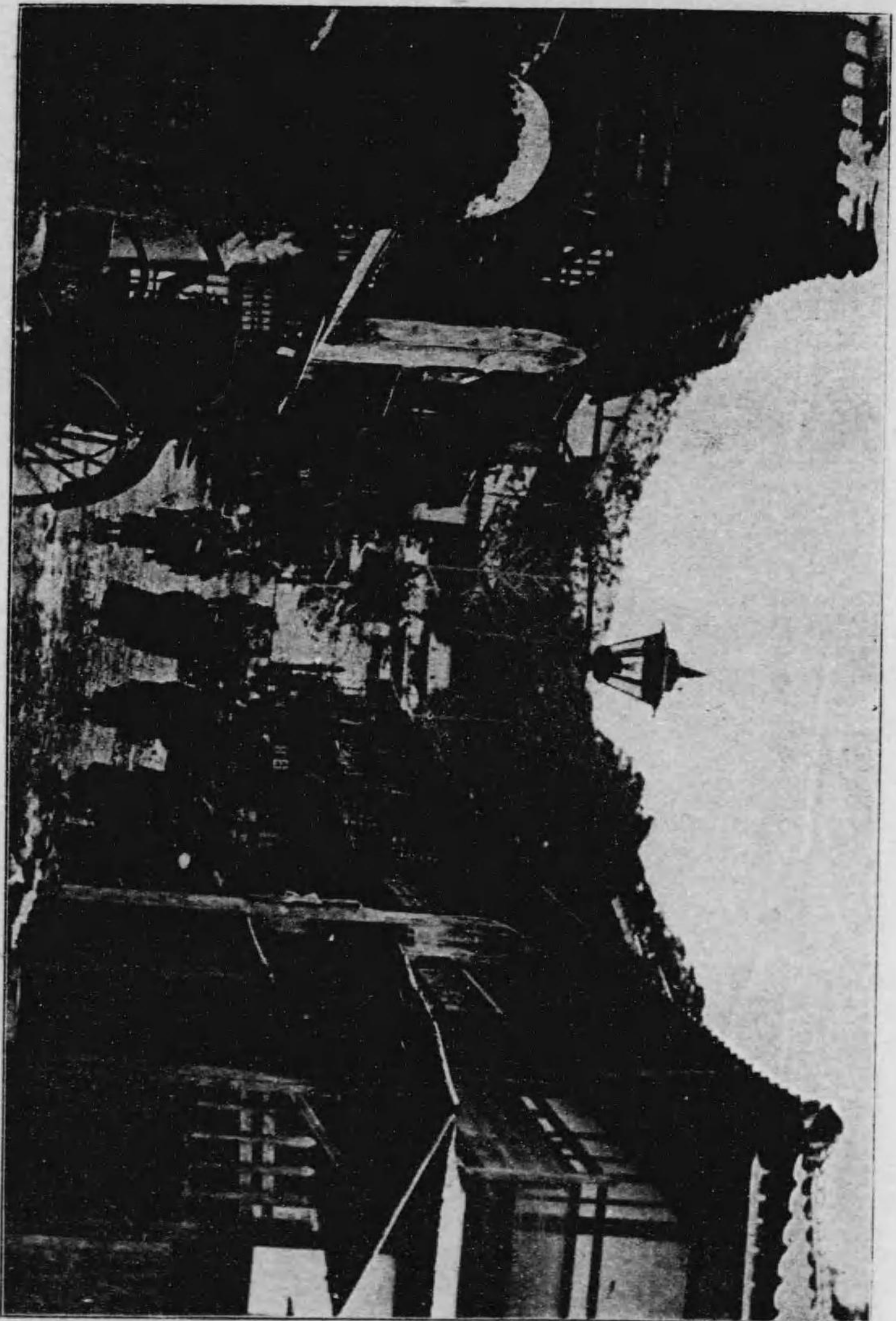
社 神 波 樹 佐 伊 後 道
The Isaruba Shrine at Dōgo, Iyo.



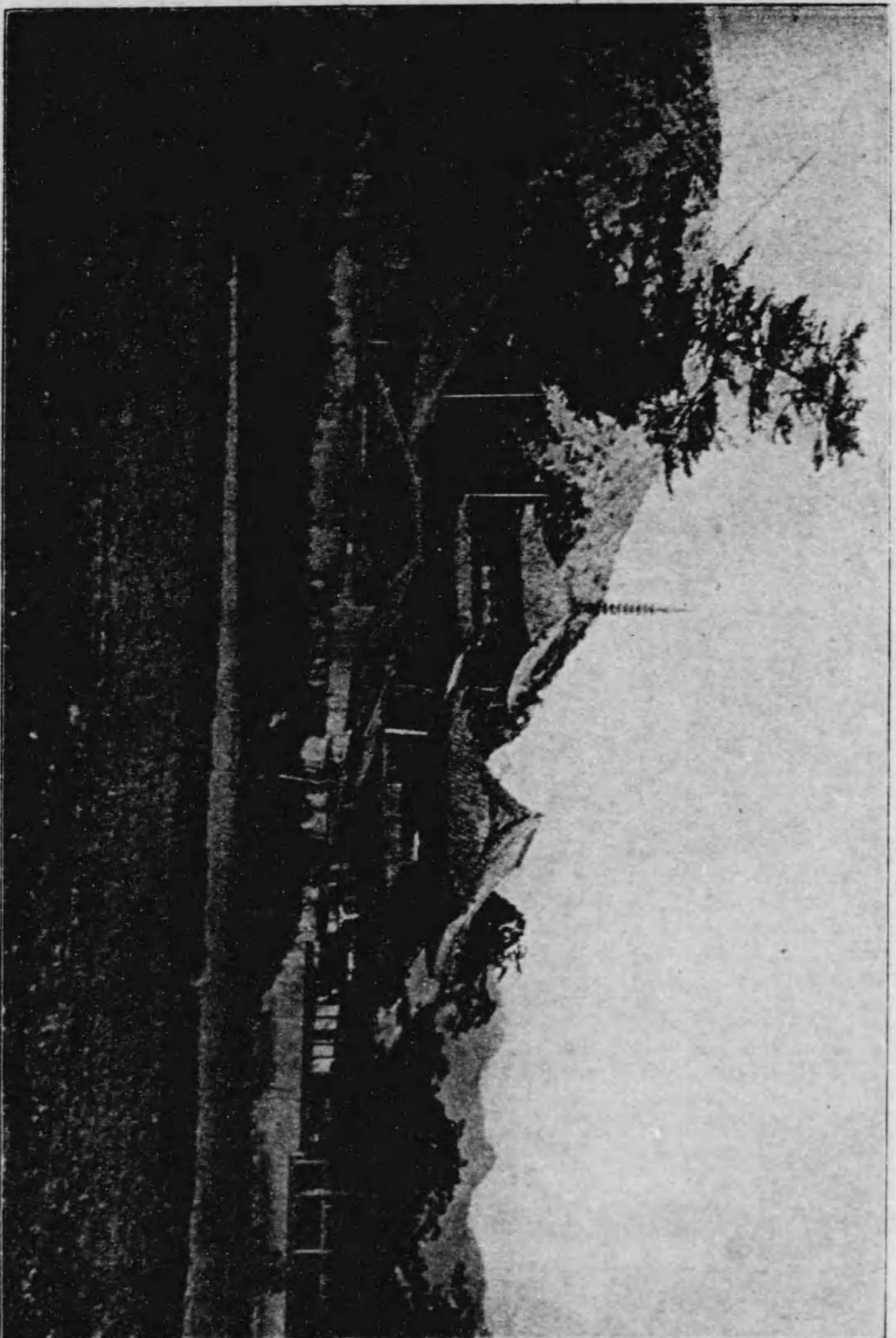
伊 豫 道 後 園
The Dōgo Park, Iyo.



▲望ヲ城山松ヒ及町之湯リヨ碑ノ泉温後道
Yunomachi and Matsuyama Castle as viewed from
the monument of Dogo hot spring, Iyo.



(マツガヤ生誕御人上通一ニ奥) 町柱々松後通
Matsugaya-machi, Iyo (In the inner part there are
the ruins of the birth place of Rev. Ippen-shōnin).



寺手石番一十五内ノ所々八十八廻四
The temple Ishideji, one of the 88 famous temples, Lyo.

道後温泉誌

道後湯之町

名義 古奥ヲ按スルニ 伊豫國ハ古昔ヨリ二部ニ分レテ宇摩新
 居 居 桑 越 智 及 温 泉 郡 ノ 内 舊 風 早 郡 以 東 ヲ 道 前 ト 云 ヒ 温 泉 郡
 内 舊 和 氣 郡 以 西 伊 豫 上 浮 穴 喜 多 西 宇 和 東 宇 和 北 宇 和 南 宇 和
 各 郡 ヲ 道 後 ト 稱 ヘ シ ナリ 然 レ ト モ 世 人 道 前 ヲ 唱 フ ル モ ノ 甚 タ
 稀 ニ シ テ 道 後 モ 亦 單 ニ 温 泉 ノ 邊 ノ 名 ト ハ ナ リ タリ
 位 置 此 地 ハ 松 山 市 十 相 距 ル 僅 ニ 十 餘 町 ニ シ テ 道 後 山 ノ 麓 ニ
 沿 ヒ 出 雲 岡 ノ 北 鷺 谷 ノ 南 ニ 位 セ リ

地 勢 土 地 高 燥 山 巒 ヲ 東 北 ニ 負 ヒ 田 圃 ニ 西 南 ニ 面 ス 綠 樹 蒼 鬱
 ト シ テ 一 水 東 ヨ リ 西 ニ 流 レ 其 一 半 ヲ 貫 下 ス
 市 街 市 街 ハ 最 モ 繁 盛 ニ シ テ 戶 數 人 口 等 ハ (明治四十四年十二月廿一日調) 左 ノ 如 シ



一戸 數 四百二十三

一人 口 千七百八十六 男 八百三十四 女 九百五十二

客舍 大小殆ト一百戸概ネ清淨ニシテ便利殊ニ宜シク浴客ヲ

懇待スルヲ以テ風ヲ成セリ

食品 海陸ノ食品ハ豊且美ニシテ人ノ嗜好ニ隨ヒ應給セサル

モノナシ

氣候 ハ温和ニシテ華氏四十度ヨリ九十度ノ間ヲ昇降ス

空氣ノ流通甚タ宜シク概シテ避暑防寒ニ適ス

古來此地ヲ熟田津又就田津或ハ飽田津トモ稱セリ故ニ豫陽俚

諺集ニハ和歌名所記ニ津之部ニ入レリト載セタリ今諸書ニ就

キ熟々考究スルニ此地往古ハ海灣溫泉ノ邊リマテ船舶ヲ通セ

シモノカ其徵効左ノ如シ

日本書記

類衆歌林

齋明天皇七年春正月丁酉朔壬寅御船西征始就于海路甲辰

御船到于大伯海時大田姬皇女產女焉依名此女大伯皇女庚

戌御船泊伊豫熟田津石湯行宮云々

後岡本宮馭宇天皇七年辛酉春正月丁酉朔壬寅御船西征始

御製

熟田津爾船乘世武登月待者

潮毛可奈比沼今者許藝乞菜

萬葉集

山部 赤人

皇神祖之神乃御言乃敷座國之盡湯者霜左波爾雖有島山之

宜國跡極此疑伊與能高根乃伊佐爾波乃岡爾立而歌思辭思
爲帥三湯之上乃樹村乎見禮者臣能木毛生繼爾家里鳴鳥乃
音毛不更遠代爾神左備將往行幸處

反歌

百式紀之大宮人之飽田津爾

船乘將爲年之不知久

伊豫古蹟志

古有大江而通街衢日中爲市殷富尤甚矣仁德帝十二年癸未
穿江控海湖名堀江過御幸阿沼美之間至于持田邑南沂石手
河往來舟船達于温湯之街衢或去或來此泊彼宿無不如其意
矣雖然迂遠而迷也洪水爲方割土民咨之遂使流瀉于西於是
坊歸其它漸水勢順下也然自是厥後此江莫泉源可受竭枯而
舟行不通塘堤弛崩焉民議謀利墜堙卑壘而爲田是厥古稱津

云磯湯者皆由此江通舟故也耳

等ノ如ク既往ノ地形推想スヘク又舊蹟考ニ昔時ハ温泉ノ地名
ヲ熟田津又就田津ト云ヒ或ハ飽田津トモ云ヒテ温泉ノ邊リマ
テ船ツキニテアリシカ今ハ地脉大ニ變シテ潮水ノ退クコト一
里半古熟田就田飽田ヲ合セ其海濱ヲ名ケテ三津ト云ヘリ又愛
媛面影ニ三津濱人ノ云ヘラク昔ハ彼ノ山際マテ海ニテ此邊リ
ハ總テ築地ナリ三津ノ三ハモト假名ニテ古 天皇ノ行幸アラ
セラレシ時御船ノ泊セシ所ナレハ御津ト云ヒシヲ後世三津ト
ハ云ヒシナル可シトアリ

西下シテ良港ニアリ一ヲ三津濱港ト云ヒ一ヲ高濱港(棧橋ノ)ト
云フ大阪神戸及高松多度津吳宇品別府大分八幡濱宇和島馬關
博多長崎其他ノ諸港ニ往復スル汽船必ス此港ニ投錨シ且大小
ノ商船常ニ輻輳スルヲ以テ運輸甚便ナリ

餘人一ケ年餘月湯治シ其効驗少カラサリシ所ナリ
同役露國俘虜五千餘人ヲ松山市各所及城北練兵場ノバラツク
ニ收容スルモノニケ年閑散無聊ニ堪ヘスシテ來ツテ温泉ニ浴
セシ者頗多シ彼等俘囚ノ身ニシテ悠々自適風詠ヲ恣ニスルヲ
得タルハ

我聖天子如海ノ恩ニヨルモノナルハ彼等モ亦感泣セシ所ナリ
ト云フ

古歌

他田津の秋の御幸の古へも

思ひ出湯に澄る月影

熟田津に船出せんとや雲晴る

伊豫の高根をまつのをむらん

道後温泉由来

伊豫國道後温泉ノ由来ハ地神ノ世大已貴命少彦名命ト同心戮
力シテ國家ヲ經營シ普テ秋津州ヲ周歴ス然ルニ少彦名ハ仁
慈深クシテ若シ蒼生ノ疾病ニ罹ルモノアル時ハ藥草ヲ採テ之
ヲ服サシメ或ハ鳥獸昆虫ノ災毒ニ觸ルモノニハ之ヲ癒スニ呪
文ノ法ヲ授ク又大已貴ハ專ラ猛威ヲ以テ民ヲ制ス斯テ二神此
地ニ到リシ時大已貴悔恥テ絶息シケレハ少彦名大ニ驚愕シ直
ニ温泉ヲ汲テ浴セシム暫アリテ蘇生シ歌ヲ詠シ暫時假寢セシ
哉ト宣ヒ勢ヒ猛ク側ノ石ヲ蹈ンテ起テ給ヒヌ其石今尚温泉ノ
側ニ在リ世之ヲ靈ノ石ト稱ス斯ノ如ク上古已ニ靈異ノアルア
リテ實ニ本邦温泉ニ浴スル是ヨリ先ナルハナク又効驗ノ著シ
キ此ノ上ニ出ルモノナシ故ニ人皇ニ降リテ畏モ
七帝四后ノ御幸アルコト左ノ如シ

第七代 孝靈天皇 后細媛

十

第十二代	景行天皇	后八坂入媛
第十四代	仲哀天皇	氣長足姬 神功皇后
第三十四代	舒明天皇	后天豐財重日足姬
第三十七代	齊明天皇	
第三十八代	天智天皇	
第四十代	天武天皇	

第三十三代推古天皇四年十月聖德太子此ニ啓ス葛城臣及高麗ノ僧惠聰法師等從フ命シテ湯之岡ニ碑ヲ建テ其ノ事ヲ勒セシム其後地震ノ變ニ遇ヒ溫泉ノ所在ヲ失スル久シ或時一鷺ノ其脛ヲ傷フアリ朝夕來リテ溪水ニ濯シ日ヲ累テ癒ルヲ得振々群ヲ追ウテ去ル觀ルモノ之ヲ奇異トシ其ノ所ヲ掘鑿シ再ヒ溫泉ノ泉源ヲ探究シテ浴池終ニ舊ニ復スルヲ得タリ今此邊リニ鷺溪又ハ鷺湯等ノ地名アルハ蓋之ニ因セリ後屢地震ノ災ヲ蒙

リテ泉脈ノ閉塞スルアリ今國史ニ見在シ或ハ傳記ニ存スルモノヲ左ニ記ス

推古天皇三十六年地大ニ震ヒテ溫泉爲ニ陷沒シ舒明天皇三年九月ニ至リ再出ス

白鳳十三年十月十四日地又大ニ震ヒ山嶽崩レ人畜死シ湯泓埋沒シ泉脈閉塞ス國司河野玉與之ヲ鑿ツテ故ノ如シ

天平勝寶元年乎智宿禰玉與僧行基律師ト相謀リ始テ石槽ヲ設置ス

享祿四年三月此地賊徒蜂起シテ湯之岡ニ相戰フ時ニ鱗刀ヲ此苔ニ洗フ溫泉立ロニ涸ル茲ニ於テ湯神社ニ祈願セシカハ湧出元ノ如クニ至レリト

此年十月國守河野太郎通直湯泓及石槽等ヲ修營ス

慶長十九年十月廿五日地大ニ震ヒ傍山崩壞シ溫泉爲ニ沒ス時

ニ加藤嘉明任國タリ諸民ヲ促シテ之ヲ穿タシム明年正月二日
 ニ至リ湧出舊ノ如シ
 寛永二年三月十八日地震フ温泉忽チ止リ其翌日ヨリ漸々舊ニ
 復セリ
 貞享二年十二月十日地又震ヒ清泉變シテ黃濁ス暫時ニシテ舊
 ニ復セリ
 寛永四年十月四日地大ニ震ヒ温泉埋沒ス翌五年閏正月廿九日
 ヨリ湧出シテ舊ニ復ス
 嘉永七年十一月五日地又大ニ震ヒ泉脈閉塞ス明年二月廿二日
 湯氣初メテ升リ四月六日ニ至リ坐浴舊ノ如ク爾後混々晝夜ヲ
 熄メス
 却說寛永十一年十月松平隱岐守定行當松山ニ徙封セラル其十
 五年定行命シテ砌石浴池ヲ修營シ且ツ其上ニ屋ヲ架シ三區域

(三)之湯ニ之湯ト爲シテ士庶ノ分ヲ別チ男女ノ混浴ヲ禁ス爾來繼
 續シテ明治ノ昭代ニ及ヘリ五年七月之ヲ改築シ新ニ樓ヲ架シ
 テ浴客ノ休憩ニ供ス是ヨリ前浴錢ヲ徴セス此ニ至ツテ初テ若
 干錢ヲ收ム然レトモ比年浴客増加シ頗ル狹隘ヲ告ク依テ十一
 年別ニ浴室(當時新湯ト云)ヲ増設シ三層ノ樓ヲ構ヘ偏ニ浴者ノ便利ヲ
 計ル爾後浴客一層増加ス此ニ原湯ノ南ニ養生湯ナルモノアリ
 泓底敷クニ砂ヲ以テシ構造稍粗ニシテ雜客混浴ノ池タリ廿四
 年之ヲ改築ス泓中清淨頗ル人意ニ愜フ左右樓ヲ設ケテ休憩ノ
 所トナシ共ニ錢ヲ徴ス茲ニ於テ市街ノ西端ニ餘流ヲ引キ男女
 一湯室ヲ新設シテ之ヲ「まの湯」ト稱シ衆庶雜浴ノ池トナス又其
 流末ニ一室ヲ設ケ「藥湯」ト稱シ黴毒者癩病人等療養ノ池トナス
 初メ原湯ノ西側ニ沿ヒテ一泓アリ牛馬ヲ浴ス今之ヲ西郊ニ置
 ク

廿五年一月第五第六室兩泓ニ涉リ石槽ヲ新設ス

明治廿五年九月再ヒ工ヲ起シ第一第二第三ニ着手ス同廿七年四月竣工ス泓中巨石ヲ以テ之ヲ疊ミ清淨ニシテ開濶浴者頗ル愉快ヲ覺フ其憩フヤ巍々タル三層樓アリ構造美盡セリ坐客自ラ情暢神爽ナラシムヘシ上ニ尙ホ一閣ヲ架ス頂上金鷲ヲ置ク名ケテ振鷲閣(正面ニ額ヲ掲ク書ハ陸軍大將山縣侯ニ成リ材ハ太古ノ湯桁ヲ用ユ)ト云フ鼓ヲ備ヘ時ヲ報ス第一室南方ノ側石ニ刻シテ改築ノ事ヲ記スアリ曰ク此湯爲構造太古貌矣徵諸古歌古以木爲桁區畫以浴寬永中久松侯就封此國疊石爲泓葺宇架其上浴制大備爾來二百五十又餘年漸屬壞頽今茲俚人相謀改築焉明治廿六年六月伊佐庭如矢誌

浴室名稱

廿七年二月第一室石槽ヲ改設ス

明治廿七年四月當温泉ノ總稱ヲ養生湯ト定ム每室ノ稱呼ハ左ニ記スルカ如シ

第一區	御湯殿	稱又新殿
第二區	乃湯	
	甲室	男浴
	乙室	女浴
第三區	神之湯	
	一室	男浴
	二室	同
	三室	女浴
第四區	養生湯	
	五室	男浴
	六室	女浴

第五區

松乃湯

左室男浴

右室女浴

以上五區十室

區外

藥湯
牛馬湯

現今 皇太子親王諸王殿下ヲ始メ内外ノ貴紳陸續入浴セラレ
大ニ名譽ヲ博セリ今其ノ貴賤男女一ヶ年(明治四年)入浴者ノ概
數ヲ掲クル左表ノ如シ

入浴人員

靈乃湯	甲室	男	二万一千八百〇八人
	乙室	女	一万七千七百九十七人
神之湯	一室	男	七万六千九百五十九人

養生湯

二室男 十七万〇八百六十二人

三室女 十二万六千六百六十九人

五室男 二十一万〇七十四人

六室女 十九万四千三百九十九人

右室男 十一万六千八百二十人

左室女 八万九千二百人

松乃湯

計 百二万四千五百八十八人

内譯

男 五十九万六千五百二十三人

女 四十二万八千〇六十五人

藥外湯

三万九千九十五人

合計 百五万五千六百八十三人

此數ハ全ク浴券ノ賣高ヲ以テ積算シタルモノニシテ例ヘハ一人ニシテ一日再浴スルアリ三浴スルアレハ人ノ數ニアラスシテ券ノ數ナリトス又本町民ニテ月定メ入浴券ヲ以テスルモノハ此限ニアラス尙小兒六歳以下浴錢ヲ徴セサル者ハ此外トス

牛馬入浴ノ概數ハ平均一ケ年

總數

三千五百五十頭

牛

二千十八頭

馬

千五百三十二頭

湯 析

古來湯析ニ就キ說ヲナスモノ甚多シ然リト雖モ太古ハ藐タリ傳記ノ正ヲ載スルモノナク口碑ノ信ヲ措クヘキナシ道後古記

ニ曰ク鴻荒ノ世椽臣ノ二大樹アリ大サ數百尋稱シテ扶桑木ト云フ湯之岡ニ柱ス其ノ埋木ヲ掘リ得テ湯析ヲ構ユト又道陽舊誌ニ云フアリ天平勝實元己丑天十一月國司乎智宿禰玉興釋行基律師トカヲ合セ之カ修營ヲナシ且ツ其南ニ一大浴析ヲ増設シタリト

六花集

伊豫の湯の湯析のかづは左八ツ

右は九ツ中は十六

影うつす伊豫の湯析の數とてや

わきてさやけき十六夜の月

雅藝歌

伊豫の湯の湯析はいくつ數しらす

かそへすよます君はしるらん

万葉集

神さふる伊豫の湯桁の其かみを

おもへは遠き行幸なりけり

新葉集

神さふる伊豫の湯桁のそれならて

わか老らくの數をしられぬ

源氏物語空蟬之卷

いよ／＼とおよひをかゝめて十はたみそなどか

そふるさいよのゆのゆけたもたどくしかる

ましう見ゆ

石

槽

天平勝寶元年乎智宿禰玉興僧行基ト力ヲ合セ始テ湯釜ヲ造リ
文ヲ鐫ス正面ニ大山祇ノ本地佛大通智勝佛ノ尊像ヲ刻ス之ヲ

行基ノ作トス後正應元戊子歲四月八日國守河野對馬守道有僧
一遍上人ニ囑シ南無阿彌阿佛ノ六字ヲ寶形珠ノ蓋ニ書セシム
以テ享祿四辛卯歲十月國司河野太郎伊豫守彈正大弼通直ニ至
ル年ヲ閱スル八百周圍ノ鐫書亦讀ム可ラス更ニ多幸山彌勒院
天德寺住職德應亨禪師ニ撰文ヲ命シ石工ヲ備後尾之道芥川ヨ
リ招キ之ヲ修營シ尊像ヲ藥師如來ニ改ム爾來三百六十又餘年
ヲ經テ明治二十六年ニ至リ浴場改築ニ際スルヤ文字ノ明ヲ欠
クノミナラス内部焚化シテ又用ユ可ラス茲ニ於テカ石槽ヲ改
設シ正面ニ大己貴命ノ少彥名命ヲ掌上ニ弄スルノ像ヲ刻シ寶
珠形ノ蓋ニ神語ヲ彫シ周圍ニ山部宿禰赤人ノ和歌ヲ鐫セシム
河野通直ノ修營ニ係ル古來ノ石槽ハ今之ヲ振覽園ニ存ス
河野通直ノ修營セシ所ノ石槽寸法左ノ如シ

内 徑

三

尺

外徑 五尺

高 七尺 外ニ寶珠形蓋ノ高一尺

上部ノ前面ニ 藥師如來佛像ヲ彫出ス

其鐫文左ノ如シ

頂上寶珠形ノ蓋上ニ

南無阿彌陀佛

第一層ヨリ輪載スルモノハ

夫吾朝伊豫之國古號二名洲亦扶桑國奉勅命大物部主伊與
大連以降連綿而治斯國河野太郎通直者出自 大日靈貴與
大山積二神之孫而饒速日尊之後也世々此國之守護德行兼
備詩禪英將也蒼生民撫育加慈悲非凡人也城館北有溫泉上
古以降湧沸不絕矣熟仁田謂之仁就田三津名曰石湯亦磯湯
上古大已貴少彥名巡斯國初浴灌也後 孝靈天皇幸也妃細

媛皇女倭迹々日百襲比子狹鳴媛皇孫大小市○○○伊豫
親王從焉後景行帝幸也八坂入姬從焉又仲哀帝幸也息長帶
媛從焉○○坐側有一湯玉碑聖德太子之浴也釋惠聰葛城臣
等從焉立碑之○○○地也洗浸聖闕躬無不靈驗則玉顏無不
喜既 舒明齊明二帝巡也(以下文不詳)

成磐豈遙凌波濤 天智天武為太子諸王從焉鳳輿巡幸總七
帝廿八○○○宮年于時有白鳳十三冬十月地大震沸湯塞忽
竭國司玉興鑿池如故○○○如意寶珠似名臣聞鴻荒之世有
扶桑大樹柱此鄉其理木堀得造○○○○湯莊嚴將謁延施
主國司乎智宿禰玉與與釋行基律師力而湯幹改築矣號外藥
局也盛哉天平勝寶元己丑天十一月吉辰
享祿四天辛卯小春如意吉辰修復多幸山彌勒院天德禪寺

德應亭撰書

備后國尾之道芥川住石大工

廿四

第一室泚中ニ新設スル所ノ石槽寸法左ノ如シ

内徑

外徑

高

泚底面ヲ拔ク

湯平ヲ拔ク

上部ノ前面ニ

其銘左ノ如シ

頂上寶珠形ノ蓋上ニ

真寔寢哉

第一層ニ

柳原左衛門尉道資彫刻

三尺四寸

五尺

九尺

七尺

四尺八寸

大己貴命ノ少彥名命掌上ニ弄スルノ像

一尺二寸

一尺

八寸

輪載ス

皇神祖之神廼御言乃敷坐國之盡湯者霜左波爾雖在嶋山之
宜國跡極此疑伊豫高嶺乃射狹庭乃岡爾立之而歌思辭思爲
師三湯之上廼樹邨乎見者臣木毛生繼爾家里鳴鳥之音毛不
更退代爾神左備將往行幸處

反歌

百式紀乃大宮人之飽田津爾

船乘將爲年之不知久

明治廿七年二月再造

前伊豫松山城主從三位菅原勝成

題神語

正五位 日下部東作

書 赤人歌

大教正 中臣衛居

廿五

畫神像

備後國尾之道石工

石井源兵衛吉光

彫刻神形并寶珠之文

伊豫國松山市石工

今岡愛三郎

製作并彫刻詠歌

養生湯東室西室ノ兩泓ニ涉リ新設スル處ノ石槽寸法左ノ如シ

内 徑 二尺四寸

外 徑 四 尺

高 九尺五寸 外ニ寶珠形蓋ノ高一尺

敷砂面ヲ抜ク 六尺四寸

湯平ヲ抜ク 四尺四寸

上部ノ前面ニ 大己貴命神像

一面 少彦名命神像

其銘左ノ如シ

頂上寶珠形ノ蓋上ニ

憫民天折始製湯泉之術

第一層ニ和歌一章ヲ輪載ス

無嘉志與理多延努奈我麗母佐良耳麻太

和幾伊豆留湯廻志留志乎叙淑母布

出雲 尊福

温泉のおこりは大汝少彦名二神の人民の天折を憐みては
しめましつるよし古史に傳ふる所なるか伊豫國道後の温
泉もやがて其ひとつにて天の下に其名高く聞ゆるまにま
に遠近より來かよひあむものいと多く其靈驗もまた著き

ことはいふも更なりざるを今回養生湯の底深くはりあら
 ためて浴む人の便よからしめむとて其業を思ひおこした
 るに湯のわき出ることは元湯にもをさくおどらぬはか
 りになりぬるはこのをものするを人たちの真心をく
 み知りて靈幸ふ神の御心の深きほどさへ思ひはかられて
 いどうれしくいと尊くなむまして温泉の衝をはしめたま
 へる神の御方を石にはりささみたるはせき出る湯の盡せ
 ぬ御恵を遠近人にくみらしめむとてのしらひにていと
 くおひかしきわさに那舞ありけるされはこのまめひと
 たちの思ひおこせる業は築きかたむる石のどこしへに千
 萬のひとのたすけとなりなむは更にて其功はた此の温泉
 とともになかれての世に遠長く傳はらむものを

明治二十四年十二月

從三位

出雲尊福誌

權大教正 神代名臣書

武藏國入間郡川越氷川神社

祠官兼大教正

中臣朝臣 山田衛居

齋戒繪之

備後尾之道石工

石井源兵衛吉光

彫刻神形并寶珠之文

伊豫和氣郡三津濱石工

吉村右三郎義長

彫刻詠歌并記文

明治卅二年中同御湯殿ヲ新設シ又靈乃湯ヲ改築ス

御湯殿石槽ニ鑄スル所左ノ如シ

上部ノ前面ニ 大己貴少彦名二柱尊像

頂上寶珠形ノ蓋上ニ

山田衛居書

健歩如故

小松宮彰仁親王御筆

靈乃湯石槽ニ鑄スル所左ノ如シ

頂上寶珠形ノ蓋上ニ

靈

明治三十二年己亥六月

從二位 伯爵 樺山資紀書

温泉温度華氏計

御湯殿	射出口温度	射出後温度
靈乃湯	甲室 男浴 百十五度五	百十四度

同	乙室 女浴	同	百八度
神之湯	一室 男浴	百十六度	百十二度
同	二室 同	同	百十度五
同	三室 女浴	同	百十度五
養生湯	五室 男浴	百十五度五	百九度
同	六室 女浴	同	同
	松乃湯 男浴	百八度五	百四度五
	同 女浴	同	百四度
	藥湯	百三度五	百三度
	牛馬湯	百三度	百二度

備考 射出口温度トハ湧出スル瀧口ノ温度ニシテ射出後
温度トハ一般入浴スル所ノ温度ナリ

温泉分析

伊豫國道後溫泉試驗成績書

依賴者 伊豫國道後溫泉事務所

一 温度

右ハ明治二十九年五月實地調査ノ上試験ヲ結了セシモノ
ニシテ其成績左ノ如シ

靈湯試驗成績表

一本泉理學的性质

- (一) 温度 攝氏四十五度八(氣壓七五七、氣温一九、九)
- (二) 外觀 淡黄色ヲ帶ヒ殆ト透明ナリ
- (三) 臭味 極微ノ異臭ヲ有シ收味ヲ帶フ
- (四) 比重 一、〇〇一一七(攝氏一五、〇)

一本泉化學的性质

「リートル」中「センチグラム」ヲ表示セシ
モノナリ

(一)(二)(三)(四)

反應 亞爾加里性

蒸發殘渣 七八、九八五

酸素消費量 五、八六五

成分 (化學的原則ニ據リ結合セシメタルモノ)

- 硫酸那篤留謨 一八、九九三
- 格魯兒那篤留謨 一六、三二八
- 硫酸加爾叟謨 一三、五一二
- 硅酸那篤留謨 一二、八五六
- 炭酸加爾叟謨 七、四二四
- 硫酸麻偏涅叟謨 五、二九七
- 重碳酸那篤留謨 二、〇六五
- 磷酸加爾叟謨 一、三四〇
- 硼酸那篤留謨 一、一六二

游離及半飽和炭酸

五、九八七

亞酸化鐵

少三量

硝酸

痕〇六跡

合計

醫治効用 (内服)

第一 貧血症 慢性腸胃加答兒

慢性癩麻質斯及胸膜炎肋膜炎

心臟ノ諸病 皮膚ノ諸病

第二 神經衰弱症 諸種ノ肺病

氣管支加答兒 男女生殖器ノ諸病

貧血ヨリ來ル腦ノ諸病

神之湯 第一第二第三室試驗成績表

一本泉 理學的性質

(一)(二)(三)(四)

(一) 温度 攝氏四十六度八(氣壓七五九、氣温一九、八)

(二) 外觀 僅微ノ黄色ヲ帶ヒ殆ト透明ナリ

(三) 臭味 微ニ異臭ヲ有シ收味ヲ帶フ

(四) 比重 一、〇〇一〇六(攝氏一五、〇)

一本泉化學的性質 「リートル」中「センチグラム」ヲ表示セシ

モノ

反應 亞爾加里性

(一) 蒸發殘渣 七七、八三七

(二) 酸素消費量 五、五五六

(三) 成分 (化學的原則ニ據リ結合セシメタルモノ)

硫酸那篤留謨 一九、六六九

格魯兒那篤留謨 一五、五九七

硅酸那篤留謨 一三、六一三

硫酸加爾叟謨 一一、八五五

硫酸麻屈涅叟謨 八、七五八

硫酸加留謨 三、七七五

重碳酸那篤留謨 三、九六四

磷酸那篤留謨 一、五九七

游離及半飽和炭酸 五、八八七

亞酸化鐵 微量

硼酸 微量

硝酸 痕跡

合計

醫治効用(内服)

第一 慢性癩麻質斯及痛風

慢性肋膜炎及腹膜炎

貧血症 腺病 皮膚ノ慢性炎症

第二 慢性腎炎及膀胱加答兒

婦人生殖器ノ慢性諸病

神經衰弱症 歇私的里

重病後ノ快後期 下痢症

養生湯東西室試驗成績表

一本泉理學的性質

(一) 温度 攝氏四十五度(四)氣壓七五七、氣温一九、七

(二) 外觀 微淡褐色ニシテ溷濁セリ

(三) 臭味 微ニ異臭ヲ有シ味ヒ收斂ナリ

(四) 比重 一、〇一四一八(攝氏一五、〇)

一本泉化學的性質 「リートル」中「センテグラム」ヲ表示セシ

モノナリ

反應 亞爾加里性

蒸發殘渣 八二、九六九

酸素消費量 六、一一九

成分 (化學的原則ニ據リ結合セシメタルモノ)

硫酸那篤留謨 二〇、三二五

格魯兒那篤留謨 一七、七九五

硫酸加爾叟謨 一五、九八六

硅酸那篤留謨 一三、〇五五

硫酸麻偏涅叟謨 九、二一四

炭酸加爾謨 二、二五二

重炭酸那篤留謨 一、六七九

磷酸加爾叟謨 一、二三一

硼酸那篤留謨 一、四二五

游離及半飽和炭酸 一六、三七五

亞酸化鐵 微量

硝酸 痕跡

合計

醫治効用 (内服)

第一 慢性胃加答兒及慢性腸加答兒

下腹充血 肝臟充血貧血

萎黃病肺炎及胸膜炎 喘息

一本泉 喉頭咽頭ノ慢性加答兒及慢性氣管支加答兒

一本泉 一般神經病 痔疾 腺病 煤毒症諸病

一本泉 子宮炎 便秘

一本泉 湯試驗成績表

一本泉 理學的性質

一本 温度 攝氏四十二度(氣壓七五六、氣溫一九、五)

(一) 外觀 黃褐色ニシテ大ニ濁セリ

(二) 臭味 異臭甚タシク味ヒ收斂性ナリ

(三) 比重 一、〇三五九三

一本 科學的性質 「リートル」中「センチグラム」ヲ表示セシ

モノナリ

(一) 反應 亞爾加里性

(二) 蒸發殘渣 九七、四二三

(三) 酸素消費量 七、六五三

(四) 成分 (化學的原則ニ據リ結合セシメタルモノ)

硫酸那篤留謨 二一、七三八

格魯兒那篤留謨 一九、〇一五

硫酸加爾叟謨 一五、二二三

磷酸加爾叟謨 一三、三六二

硅酸那篤留謨 一一、四〇六

硫酸麻倔涅叟謨 六、七一五

硫酸加惱謨 四、〇三六

硼酸那篤留謨 二、四一八

炭酸加惱謨 二、二三五

重炭酸那篤留謨 一、二六八

游離及半飽和炭酸 六、五七八

亞酸化鐵 少 量

硝酸 少 量

亞硝酸 多 量

安母尼亞 少 量

酸化水素 少 量

醫治効用 (外用)

第一 梅毒 瘡毒 疥癬其他慢性皮膚病 癩病

腺病 軟下疳 硬下疳 粘液漏症

第二 多血症 五痔症 肥胖病

尿道膀胱及腎盂ノ加答兒 子宮腫脹 水腫病

黃疽病

本泉ハ決シテ内服スヘカラス

右試驗成績及報告候也

明治二十九年六月五日 廣島衛生試驗所技師兼長

杉原 孟

温泉 泉 碑

釋日本紀及伊豫風土記等ニ載スル所 推古天皇四年十月聖德

太子萬城臣及高麗ノ僧惠聰法師等ヲ將ヒテ道後温泉ニ行啓アリ大ニ湯ノ靈驗ヲ感歎シ伊佐爾波岡ニ碑ヲ建テ其事ヲ勒スト今其所在ヲ失ス蓋シ天武帝白鳳十三甲申歲十月十四日四國地大ニ震ヒ土佐ノ田圃五十四萬頃陷テ海トナリ伊豫温泉壅塞ス云々當時碑モ亦土中ニ陷没セシヤ知ルヘカラス爾來好古ノ徒百方搜索スト雖モ今尙其所ヲ得ス其文載セテ釋日本紀ニ在リ左ニ抄録スルカ如シ

温泉碑

法興六年十月歲在丙辰我法王大王與惠聰法師及萬城臣道遙夷與村正觀神井歎世妙驗欲叙意聊作碑文一首
惟夫日月照於上而不私神井出於下無不給萬所以機妙應百姓所以潛扇若乃照給無偏私何異子壽國隨革臺而開合沐神井而
瘳疹詎外于落花池而化溺窺望山嶽之巖嶠反冀子平之能往椿

樹相癡而穹窿實相五百之張蓋臨朝啼鳥而戲吐下何曉亂音之
聒耳丹花卷葉映照玉菓彌葩以垂井經過其下可優游豈悟洪灌
霄庭意與才拙實慚七步後定君子幸無微蚩吟也

明治廿年五月舊松山藩主久松勝成公碑ヲ温泉場ノ西側ニ建立
以同廿五年十一月之ヲ温泉場東ノ丘ニ移ス其文ニ曰ク

道後溫泉碑

國史曰 舒明帝十一年冬十二月幸伊豫温湯宮明年夏四月
帝至自伊豫又據伊豫國風土記所載 景行帝嘗幸温泉 仲哀
帝亦幸温泉 齊明帝幸時 天智帝 天武帝為太子諸王亦同
從幸并 舒明帝幸凡六云風土記又稱上古之時少彥名命病劇
既以為死當時此地已有溫泉於是大己貴命用以浴灌少彥名有
間乃蘇亦不自知病已去體起曰吾假寢乎遂健步如故蹈旁石去
其跡蓋存蓋寔為云 吾邦浴溫泉之始則地神氏世所從來尙矣

非特見賞於人皇也後乃祀少名大己於其旁為湯神又有伊佐爾
波神祠亦曰湯築後更曰湯月相傳 仲哀帝與 神功后幸温湯
后因有身生 應神帝 應神廟號八幡宮故 應神帝為主因
並祭 仲哀帝神功后今名曰湯月八幡宮崇祀最大云謹按國史
諸書所載 我邦温泉所創莫先於此又考萬葉諸什國風所采莫
尙於此湯之前故有圓石圍可三尺名曰玉石亦古歌所詠以為神
代之表者也則立自太古可徵矣其諸神祠載在
祠典 諸帝行宮今御幸寺是也夫陵谷變遷桑海移易名存實沒
蓋亦不尠而此湯之出也蓋自剖判厥曠遠者不知其始姑以所聞
近者年紀尙且在地神氏之始至今數十萬載而不絕浴者起廢其
効日新豈非造化凝精神明祐福者邪風土記又載 聖德太子所
命立碑文雖世所記聞然其辭不可讀義多可疑且其石不存今不
可得而考據故闕焉爾自寬永中松山侯食封伊豫國温泉在疆距

松山治城東北廿里於是累世尊崇其湯及神祠及今矣源定喬刻
 石紀其事志傳永久乃典故所列足以徵文獻矣銘曰
 爰有溫泉在豫之土厥初養民復自太古人皇錫寵六降帝武
 神后禮祀載震茲許天開震滋祉我東方歷載千萬原泉彌長養
 精獨穢疾疣廼忘億兆一浴壽考無彊廼顧其側神廟奕奕應皇陟
 降於穆不斁二神攸相永護溫液其永維何有密玉石於昭先王誕
 陳國風先民自古其頌于隆松侯受封克敬神功立石勒事厥圖無
 窮南郭服部元喬選
 天保十四年歲在癸卯冬十一月望於道後客舍之東窻
 越後長岡雪城中澤俊鄉謹書
 碑陰三載スル所左ノ如シ
 此所刻服部南郭碑文寶曆中松山藩第六世松平定喬公命所撰
 當時未及刻石而寢不詳其故文中引伊豫風土記今逸不傳惟溫

泉一項幸載在釋日本紀據此則聖德太子立碑湯岡側者信矣文
 亦載釋紀中惜其碑蚤亡不知所在願天武帝十三年四國地大震
 土佐田圃五十萬頃陷為海伊豫溫泉壅塞意碑亦此時沒土中者
 歟浴池之制古以桁計其數極多六花集有左八右九中十六之歌
 催馬樂歌以伊豫湯桁為不易算源語以屈指計物比數伊豫湯桁
 其盛可知矣中間無聞寬永十五年藩祖定行公大加修繕砌石作
 三方池池各方二間溫泉墳出乎其中曰一之湯二之湯三之湯一
 湯限士人二湯婦女三湯庶人其背承三池之流為一大池底敷砂
 以板圍分三區蓋古之遺制也一日十錢湯一日十五錢湯其最廣
 曰養生湯旅人難客浴之皆不要錢十錢十五錢亦唯名而已其實
 排數錢蓋襲舊稱也既成公命天德寺僧雲巖作溫泉記書板揭門
 楣今已朽矣太子之碑失所在雲巖之記不上金石而南郭之文亦
 不果刻則定喬公之遺志永湮滅而溫泉終無一碑傳舊事也里人

伊佐庭如矢等慨于此請舊藩主從四位久松勝成公建碑公家幸
有中澤雪城所書南郭文欲刻之以成先志乃擇貞珉命工並命啓
書其事勒諸碑陰啓聞廢藩記後新聞一湯室浴法亦大變故補南
郭文之所不及詳記藩制以傳於後云勝成公松山藩第十三世初
仍襲稱松平氏維新後復本姓

明治十九年丙戌六月

松山 從六位藤野正啓謹識

古富 卓書

山崎 群鴻鐫

請帝行在所

第七代 孝靈天皇 后細媛

今其所ヲ知ラス

第十二代 景行天皇 后八坂入媛

湯泉場ノ北小陵中古河野氏香花院ノ舊跡ニシテ現今尙龍
穩寺山ト稱スル所ナリ

第十四代 仲哀天皇 氣長足姬 神功皇后

伊佐爾波神社へ登ル石礎ノ中間ヲ南ニ折レテ山坡アリ近
來マテ鐘樓ヲ置キシ所ナリ

第三十四代 舒明天皇 后天豐財重日足姬

和氣郡御幸村御幸寺山ノ麓現今御幸寺ノアル所ナリ

第三十七代 齋明天皇

第三十八代 天智天皇

第四十代 天武天皇

三帝ハ奥谷ニシテ現今寶嚴寺ノアル所ナリ

靈之石

又玉之石世俗或ハ
御足形石ト云フ

温泉場ノ前ニ在リ所謂大古大己貴命湯ニ依リテ蘇生シ側ノ石

ヲ履ミテ起チ給フ其足痕鑿然トシテ今尙存セリ
日本書紀ニ載ス玉之石トハ其形ノ圓ナルヲ謂フニ非ラス大
己貴命ノ足痕ヲ美稱スルナリト

御車寄之松

靈之石ノ側ニ松有リ明治三十六年十月十六日時ノ
東宮殿下行啓ノ際御車ヲ寄セ給ヒシ處ナリ稚松已ニ凌雲ノ雄
姿有リ靈之石ト共ニ千歳ノ記念ト爲スヘシ
古歌

伊豫の湯の汀に立る靈の石

これを神代のしるしなりける

鷺

池

温泉ノ庭内ニ一小池アリ湯氣ヲ帶フ之ヲ鷺池ト云フ彼ノ鷺脛
ノ毀傷シタルヲ自ラ浴治セシハ此所ナリ

鷺

石

一ニ羽休石ト云フ

鷺ノ脛ヲ傷フ者來リテ爰ニ止マリ溪邊ヲ占メ脛ヲ浸シテ石上
ニ憩ヒ又浸シテ石上ニ憩フ斯クノ如クスルコト久シク其足形
石ニ存シテ歴々タリ然ルヲ何時カ失亡シテ之カ所在ヲ知ラサ
リシニ寛政十二年春二月中旬松山城下圓光寺住僧明月屢々來
テ聖德太子建ツル所温泉ノ碑ノ湮滅セルヲ所々ニ探求シ偶々
鷺溪ノ邊ヲ彷徨シテ此石ヲ發見シ之ヲ二神社ノ傍ニ置ク其後
明治五年温泉ノ上方觀音堂(越山)ノ側ニ遷シ再遷シテ温泉場ノ
庭内ニ置キ又元ノ二神社ノ前ニ復置シケルカ明治二十五年八
月ヲ以テ祝谷村民二神社ト共ニ同村客天神ノ傍ニ遷シタリ

古碑臺石

振鷺園内ニ在リ明治五年八月原湯ノ前ニ一層樓ヲ建築スルノ
際往昔聖德太子ノ建設ニ係ル所在不明ノ温泉碑ヲ搜索センカ

タメ湯泓ニ接近ノ地ヲ穿ツコト數十步于時今ノ神乃湯第三室ノ前ヨリ掘出セルモノニシテ古色蒼然タル花崗石ナリ

湯神社 一名西之宮

温泉ノ南冠山ノ頂上ニ鎮坐大己貴少彦名ノ二柱ヲ奉祀ス勸請年紀詳ナラス相傳フ景行天皇ノ御宇或ハ舒明天皇ノ御宇ナリト云ヘリ延喜式内温泉郡四社ノ一ナリ抑モ本社ノ祭神ハ我朝醫家ノ祖神ニシテ衆庶崇敬最モ深ク四來ノ浴客爭ヒ請テ身命ノ安全疾病ノ快復ヲ祈ル應護殊ニ著名ナリ

某書曰人皇第三十四代舒明天皇十一年己亥冬十二月己巳朔壬午幸于伊豫温湯宮此時宮前在椋臣二樹木斑鳩趨鷄二鳥大來集天皇憫愛之勅多掛稻穗而養之

歌

前右府公實

鳥の居る木々に稻穂をかけたまくも

かしこき御代の恵みなるらむ

朝日さす千木のかたそき影をいて

算ふ湯桁や數まざるらん

出雲崗神社 湯神社ノ西ニ鎮坐

出雲崗神社ハ素盞鳴尊稻田姬命ノ二柱ヲ合セ祀ル處ニシテ延喜式神名帳ニ所謂温泉郡四社中ノ一ナリ勸請年紀詳ナラス
古歌

夕日かけ八色のくもの古を

ねもひ出雲の岡の神垣

冠山

温泉ノ南ニ在リ巔ニ温湯守護神大己貴少彦名ヲ祀ル所ノ祠アリ蓋シ二神ノ恩澤ヲ蒙ル洪大ナルヲ以テ蒙山ト名ケシヲ國音

相通スルヨリ後世冠山ト稱ヘシナリ一書ニ云フアリ冬季麓ヨ
リ湯氣ノ昇ルヤ恰モ雲ノ出ツルカ如シ依テ出雲岡ト稱セシト
又冠山ハ煙山ノ轉語ナリトスト云ヘリ

兒守社

冠山ノ南石碓ノ東中間ニ在リ

神大市姫命ヲ齊祀スル所ニシテモト兒守御前社ト稱ヘ居リシ
カ明治三年御前ノ二字ヲ削ラル世俗乳守之神ト稱シテ乳ニ乏
シキ者多ク之ヲ信仰ス賽スルニ土祠ヲ以テス堆積羅列其數ヲ
知ラス下陣ニ遊行一遍上人ノ父別府七郎通廣ノ靈ヲ祭レリ故
ニ一遍遊行ノ節ハ必ス參拜セシト云フ

鷺谷山大禪寺

溫泉ノ北鷺谷ニ在リ故ニ山號トス元祿九丙子歲黃檗禪宗大休
和尚ノ開基ニテ本尊ハ釋迦如來ナリ境内ニ支那舶來ノ觀世音
及芭蕉天滿宮等ヲ安置ス什物ニハ千呆和尚ノ壽像並十八羅漢

及釋迦如來(何レモ唐縫)ノ幅等アリ

蓑毛櫻

大禪寺庭内ニ開基和尚大休ノ手植ノ一櫻樹アリ名クルニ蓑毛
ヲ以テス蓋シ鷺ノ蓑毛ニ因リテナル可シ

陰涼樹

大禪寺ノ西ヲ少シク登レハ大休ノ墓アリ傍ニ一松樹ノ枝葉宛
カモ孤鶴ノ翅ヲ伸ルカ如キアリ之ヲ陰涼樹ト唱フ大休初メ當
寺ヲ創立スルヤ一松樹ノ枝葉鶴翼ノ狀ヲナスモノヲ撰テ此ニ
之ヲ樹ユ

鷺之井

往古大禪寺ノ下方ニ一井アリ鷺之井ト云フ相傳フ昔時湧泉清
澄ニシテ混々絶ル時ナク能ク眼病頭痛等ヲ治セシト然レトモ
多少年所ヲ經其跡湮滅シテ知ルニ由ナシ今同地ニ一ノ古井ア

リ恐クハ其遺趾ナラン

圖 滿 寺

本尊ハ坐像地藏尊其長ケ一丈二尺餘木造ニシテ行基ノ作或ハ定朝ノ作ナリト云フ昔當寺内ニハ巨大ナル梅樹數多アリテ世ノ賞スル所ナリシカ漸ク老朽シ元文中全ク枯了セリ後世其ノ名ノ湮滅センコトヲ惜ミ數株ノ梅ヲ植ウ今尙存ス寺内ニ古池アリ蛙鳴ヲ聞クニ名アリ松山城主松平隱岐守定長山城ノ井手ノ蛙ヲ此ニ放ツ四五月ノ候其音ヲ弄ス相呼相應フ清陪愛ス可シ

豊國山寶嚴寺

往古誓願院

奥谷ニ在リ一逼上人誕生ノ舊跡ナリ天智天皇四年國司乎智守興奉勅之ヲ建立ス本尊ハ阿彌陀如來ニシテ春日ノ作トス中興殆ト衰滅ス弘長三年一逼ノ父如佛寂スルヤ翌四年ヲ以テ

河野上野介通繼得能藏人介通秀ト相計リ之ヲ再建シ且子院十ニヲ置ク後子院ハ自然衰滅シテ只林光庵ノ一ヲ存セシカ是モ亦近年破壊シテ取除キヌ其庵室ニ安置セシ上人自作ノ像今尙本寺ニ存ス則チ現今ノ松ケ枝町ハ衆坊ノ陳迹ナリ

伊佐爾波岡

一射狹庭又誘庭

古來伊佐爾波神社ノ後柿之木谷ト唱フル邊リヨリ湯月古城(現公道後)マテ一脉ノ丘陵ニシテ總テ之ヲ伊佐爾波岡ト稱ヘシヲ河野氏湯月城ヲ築クニ當リ要害ニ惡カリナントテ山脉ヲ斷チ其間ヲ濠トナシケルカ故往古ノ岡ノ形象トハ全ク異レリ伊豫風土記ニ云フ聖德太子ノ温泉碑ヲ建ツルハ則チ此所ニシテ諸人常ニ其碑ヲ見シカタメ互ニ誘ヒ來レリ因テ此名アリ云々

古歌

里人はいさどさそひて誘庭の

伊佐爾波神社

伊佐爾波神社ハ祭神 應神天皇ニシテ 仲哀天皇 神功皇后
 ラ合祀セリ伊佐爾波岡ニアリ延喜式内温泉郡四社ノ一ナリ相
 傳フ南都大安寺住侶行教豊前國宇佐ヨリ上京ノ途次來テ此地
 ニ勸請セリ又河野家系ニハ河野元興是ヲ建立シ道後七郡ノ守
 護神トナシタリト云フ河野家譜ニ載スル所延久五年國司伊豫
 守源賴義朝臣河野新太夫親經ト同シク八個所ノ八幡宮ヲ再造
 シ四拾九個處ノ藥師堂ヲ建立スト蓋シ當社モ此八社ノ一ニシ
 テ當時再建ニ係ルモノナランカ下テ明應ノ頃河野刑部大輔通
 宜又再建シ累代之ヲ崇敬シテ湯月城ノ守護神トナシ神領五拾
 石ヲ寄附セラル河野家退轉ノ後暫時主宰ナク社領モ亦没シ宮
 殿破壊シ神寶記錄等大半紛亂ス故ニ社傳分明ヲ闕ケリ慶長五

年ニ至リ加藤左馬介嘉明當國ニ封セララル、ヤ松前城ヲ今ノ地
 ニ移シテ勝山城(後松山城ト改ム)ト稱シ永ク當社ヲ以テ本城ノ鎮守ト
 ナス是ヨリ前キ嘉明朝鮮ノ役ニ際シ當社ニ祈願スル所アリシ
 カ果シテ戰地唐島ニ於テ神夢ヲ蒙リ明日一戰大ニ勝利ヲ得武
 名ヲ異域ニ輝セリ嘉明深ク其靈驗ニ感シ歸朝ノ後更ニ社殿ヲ
 建設シ神領一百石ヲ寄附セラレタリ加藤氏徙封ノ後蒲生氏崇
 敬故ノ如シ蒲生氏嗣ナク國除セラレ寛永十一年松平隱岐守定
 行封ニ當國ニ就キ勝山城ヲ治ム崇敬舊ニ仍ル寛文七年定行孫
 定長故アリテ深ク當社ヲ尊信セラレ飛驒ノ良匠ニ命シテ社殿
 ヲ改築セシム其結構山城ノ石清水ニ倣ヒ寶殿廻廊墻垣ニ至ル
 マテ悉ク華麗ノ彫刻ヲ施シ莊嚴善ヲ盡シ美ヲ盡セリ茲ニ於テ
 神威益々新ニ光明嚇々今ニ至ルモ詣者絶ル時ナク渴仰他ニ類
 ナシ當時旗幟弓矢太刀鎧等莊嚴具備セサルナク粟米二百石ヲ

以テ神領ト定メラル維新後社領ノアルナク産子ノ保護スル處
トナリ將ニ舊觀ヲ失ハントス惜哉而シテ寶物中
四帝一后之宸翰 時鳥香爐 輪光琵琶 孫武子之卷三冊
信宗皇帝額二枚 吉光之短刀 國光之短刀
等最モ著名ナリ其ノ他書畫幅樂器等百般ノ器具數百アリ悉ク
舉クルヲ得ス

釋日本紀曰 仲哀天皇 神功皇后ト俱ニ道後ニ幸セシ時
今ノ社地ノ所ヲ以テ行宮ト定メ給ヒシ故ニ此山ヲ御假屋山
ト云フトアリ

口碑曰 仲哀天皇 神功皇后ト共ニ當國ニ幸アリテ今ノ
社地ノ所ニ行宮ヲ營ミ給ヒ 應神天皇ヲ身籠リ給ヒシニ因
縁シテ社地ニ充テタルナリト

伊豫風土記曰 仲哀天皇 神功皇后ト同シク幸シ給ヒシ時

行宮ニ湯泓ヲ築キ温湯ヲ汲運ヒシニ因リ此所ヲ湯築ト唱
ヘシニ後世湯月ト改ム蓋シ國音相通スレハナリ

當社明細帳曰當社往古伊佐爾波神社中古湯築大神近代湯月
三 八幡宮明治三年伊佐爾波神社ト復舊ス云々

古歌

今朝みれば雪ふりしきぬ伊佐爾波の

きよめいそくな神のみやつこ

愛比賣方道の後の神の温泉の

にこらて澄める月の宮邊に

稿

溪

道後十六谷ノ中ニテ最モ有名ノ勝地ナリシカ河野家没落ノ後
世ノ變遷ト共ニ漸次荒廢ニ屬シ唯其ノ名稱ノミナリシヲ天保
某年松山藩士大高坂舍人(號天山)亭ヲ營ミ五清淨室ト名ケテ自ラ

樂シム天山沒後再ヒ荒廢セシヲ明治十七年有志輩其名勝ノ湮滅センコトヲ嘆キ五清浮室ノ遺趾ニ就キ清流ニ沿ヒ點々二十有餘亭ヲ架ス五六ノ割庖店アリ水清ク樹深ク幽邃ニシ蒼翠瀟瀟トス實ニ此境ノ一大勝景ト云フ可シ

御手洗川

伊佐爾波神社ノ馬場ヲ横流スルモノ之ヲ御手洗川ト云フ清流掬ス可シ正面ニ石橋ヲ架ス大稜式ヲ此ノ橋上ニ修ス又年ノ早魃ニ當テハ此ノ石ヲ徹シテ板橋ヲ架シ浮橋ノ祈禱ト稱シテ此ニ之ヲ修ス總テ社頭ノ秘訣トナス其因知ル可ラス側ニ老楓二三株アリ秋後愛ス可シ又流ニ沿ウテ一小池アリ元文二年春松山候命シテ之ヲ穿タシム蓋シ石清水ノ放生池ニ擬ス池邊花木數多アリ風致尤モ幽閑春夏ノ候賞スルニ堪ヘタリ

湯月古城 或湯月館

冠山ノ南ニ在ル一垓ノ丘陵是ナリ元曆二年河野伊豫守通信ノ經營(一説ニ河野通盛ノ築城トモ云フ)ニシテ其子孫代々ノ治城タリ周圍ニ二重濠アリ東方ヲ大手門トシ西方ヲ搦手門トス外周五百二十間堤内周廻四百六十間東門ヨリ西門迄ノ距離百六十間本壇高サ四五間三尺廣サ東西九間南北十一間三尺中壇廣サ各東西五間南北三間ニシテ本壇ヨリ少シク下リテ巽及西北ノ三ヶ所ニ又北中壇ノ北落ナル杉之壇ハ高サ七間廣サ東西十二間南北四十五間三尺本壇ノ南西ニ一小溪ノ形ヲ爲ス所アリ之ヲ土器谷ト云フ此ハ是レ河野家食膳毎常土器ヲ用ヒ日々之ヲ此地ニ捨ツ故ニ此名アリ今尙偶地ヲ穿テ土器數枚ヲ獲ルコトアリ天正十三年ニ至リ河野家沒落スルヤ福島正則暫時茲ニ治城セシカ其ノ越智郡古國分ニ移リシヨリ復住ムモノナカリシカハ爾後漸次竹林ト變シ常ニ烏鶯ノ棲宿スル所トナリ居リシニ明治十九年

新ニ拓テ公園トナシ衆竹ヲ芟除シテ花樹ヲ培養ス

道後公園

湯月城ノ荒廢ニ屬スルヤ草竹濫リニ繁茂シ當時ノ城郭池濠ノ地空シク鳥魚ノ淵叢トナリ居リシニ明治十九年官之ヲ公園ニ附シ大ニ艸菜ヲ誅除シ新ニ花樹ヲ種植シ四時ノ美觀漸ク具備ス實ニ温泉浴後散策ノ適所トナリタリ

御手植之松

道後公園茶畑臺ニ鐵柵ヲ廻ラシタル一本ノ雄松アリ是明治三十六年十月十六日今上陛下マダ東宮ニテ行啓アリシ時本縣知事本部泰ノ懇請ニヨリテ栽エサセ給ヒシモノナリサレハ自ラ千歳不變ノ瑞相有リ其側ニ四阿アリ是御休憩アラセラレシ蹟ナレハ其以來俯仰低徊肅然拜觀セサル者無シ

岩崎神社

初メ岩崎權現ト云フ道後公園内ノ東南ニ在リ相傳フ河野氏ノ湯月城ヲ築クヤ當時伊佐爾波神社此地ニ鎮坐アリシヲ現今石礎ノ中間南側ニ遷座シ而シテ舊趾ニ一小祠ヲ營ミ遺趾ヲ存セシモノ是ナリト

護國山義安寺

道後公園ヲ距ル東二百步許ニ在リ當寺ハ河野彌四郎景通ノ子彦四郎義安(后改通安)ノ創立ナルヲ以テ寺名トナス云々又一書ニハ河野通秋法名ヲ義安寺殿トス故ニ例シテ一寺ヲ建ツトモ云フ本尊ハ釋迦ノ坐像ニシテ寺内ニハ行基作ノ藥師唐刻ノ觀世音及ヒ石地藏等ヲ安置ス相傳天正十三年河野家沒落ノ時老臣等此寺ニ於テ符水ヲ飲ミ相共ニ二君ニ仕ヘサラシトヲ誓約セシト後寛政三年五月二十九日雷火ノ災ニ罹リ縁記古文書ヲ

始メ河野家代々ノ位牌及寄付狀十六羅漢ノ畫幅等盡ク灰燼ニ歸ス茲ニ於テ傳記ノ憑ルヘキナシ寔ニ惜ム可シ是ヨリ前松平定靜侯來テ當寺ノ書類ヲ閱覽セシヨトアリトソ

熊野山石手寺

溫泉郡道後村大字石手ニ在ル巨刹ニシテ往古ハ虚空藏院安養寺ト號シ堂塔廊宇宏大ニシテ六十六坊アリシト云ヒ傳フレトモ今ハ其十一ヲ存スルノミ抑 元明帝和銅五年三月伊豫大領河野玉與白山權現ヲ此ニ勸請シ其子玉純 聖武帝神龜五年ニ當リテ七堂伽藍ヲ建立セリ山上ニハ愛宕大權現籠ニハ三重塔(本尊釋迦脇侍文珠 普賢何モ運慶ノ作)大師堂(弘法像 同作)觀音堂(十一面 行基作)藥師堂(本尊立像 運慶ノ作)阿彌陀堂(本尊坐像 運慶ノ作)等其ノ他尙多々アリ中ニ就テ三重塔念佛閣鐘樓仁王門(仁王運慶作)等尤壯麗ヲ極ム又境内ニ姿見池不動石等アリ什寶ニハ太古ノ石劍影向鏡十八天之畫國司ノ式目足利家ノ教

書空海及一逼上人ノ筆蹟等其他枚舉ニ遑アラヌ又昔時河野氏ノ子弟等多ク當寺ニ於テ修學ス且ツ山門ノ邊リニ伊豫守源賴義朝臣ノ碑アリ

車返櫻

石手寺ノ境内藥師堂ノ傍ニ在リ保元元年崇徳天皇ノ讚岐國ヨリ此花 叙覽ノタメ行幸アリシニ偶此ノ花開カス空シク門前マテ 還幸アラセラレシ時俄ニ花ノ開キタリト 奏聞アリケレハ即チ御輦ヲ返ヘサセラル依テ此ノ稱アリ當時ノ御製ニ 名におは、復も来て見む花の春 夕影のこす雪の古寺

大山積神社

石手寺ノ東ニ在リ舊記ニ曰ク弘安二年河野對馬守通有祈願ス

ル所アリテ越智郡宮浦村大山積神社ノ末社十六坐ノ一ヲ此ニ
勸請セシモノナリト

城山

温泉郡湯山村字末ニ在ル古城趾ニシテ河野通能ヨリ數代此ニ
城居セシカ土佐守護長曾我部元親ノ陷ル所トナリ河野家ノ七
將此ニ自盡ス後村民爲ニ一小祠ヲ營ミ其靈ヲ祀ルト云フ甲岩
古梅等アリ共ニ河野ノ遺物ナリトス

柳素鷲社

温泉郡湯山村字柳ニ在リ明治三年マテ柳牛頭天王ト稱ス故ニ
世俗柳天皇ト云フ除疫ノ神ナリトシテ歳首ニハ諸人多ク參拜
ス

天一神社

温泉郡湯山村字藤ノ野ニ鎮坐マス天一神社ハ奈賀加美天御中

主神ヲ合セ祀ル處ニシテ安民快樂五穀豐饒ヲ守ラセ給フ神德
殊ニ著シケレハ旱魃雨ヲ祈ル必ス靈驗アリ因テ舊藩主松山侯
深ク此ヲ尊信セラレ領内ノ祈願所トナス故ニ諸人ノ賽スルモ
ノ亦多シ殿内ニ春日作ノ面アリ之ヲ湧ケ淵ニ鑑シテ雨ヲ祈ル
神祕アリ

新田靈社

新田靈社ニアリ共ニ湯山村ニ在リ字河中(舊日浦村稱)ニ在ルモノヲ
上新田大明神ト稱ヘ其ノ水口(舊別名村稱)ニ在ルモノヲ下新田大明
神ト稱ヘシカ現今下新田ハ上新田ヘ合祀セラレ社前ニ碑アリ
左少將新田公義宗其從兄左衛門佐脇屋公義治ノ事ヲ勸ス二公
ノ墓碑今尙ホ社頭ヲ東シ距ル數十歩ノ叢中ニ在リ又下新田ノ
社ヲ合祀セサリシ前社殿ノ扉歌アリ左ノ如シト云ヘトモ今ハ
絶テ知ルニ由ナシ(上新田ハ義宗下新田ハ義治ヲ祀ルト云フ)

なにしおふ恨はされよ梓弓

矢竹心のいしにたゝんと

新田公祠之隣

伊豫國道後温泉郡山中日浦村有新田祠者二在東曰上新田祠祀左少將新田公義宗也在西曰下新田祠祀其從兄左衛門佐脇屋公義治也里人相傳南軍既衰連戰不利正平廿四年秋八月二公潛匿乎出羽之羽黑山以圖恢復三十年矣及南北講和其志不果明德四年春正月舉族密去羽黑山經信濃適紀伊依雜賀貞直夏四月航海而來伊豫依河野氏族土居通景得能通綱居宇和郡猛嶽城最後從此山村應永十二年秋八月七日義治卒齡八十三冬十一月五日義宗卒齡七十四麾下二十七士亦皆終于此地後經百四十有餘年河野通直欽二公志節就其墓各立小祠歲時致祭云實天文十七年也樞案水府日本史云正平二十三年七月義宗與義治起兵與上杉憲

將等戰不克死之又云建德元年義治出軍武藏上野與上杉朝房戰不克走信濃不知所終但野乘名後太平記者錄二公蹤跡甚詳曰義宗伴死與義治閑行潛匿於羽黑山明德四年密赴伊豫又記天正初二祠鳴動事云二公終老死于彼地所司乃建小祠崇祀之號曰新田明神以今觀野乘所錄與里民所傳如合符節著正史據足利氏所錄故至僻境軼事則不得而知也野乘則民間所私記故幽隱微密之事自得其實耳松村長重者日浦村產也常憾其事湮沒不傳于世欲得余文以勒諸石嗚呼新田氏之族請忠貫日展轉苦戰百敗不屈真古所希觀至如二公亦惟終身圖恢復老竟死于僻邑深山之中天之福善者或不信乎天正之後足利氏亡滅而幕朝之創業出于新田氏之派流則天之報應果在於此而二祠鳴動者或二公之靈有感乎其際會耶余嘉長重之志乃詳記二公終始且辨野乘之得實與正史之傳訛係之以銘曰

建武告駁、爭在兩源、赫々新田、忠勇哀門
烈矣二公、百戰僅存、恢復不遂、安慰冤魂
天撥亂垂統、果在支孫、天之報應、視諸後昆
喜永紀元戊申秋八月、松山、日下、樑撰

湧ヶ淵

石手寺ノ水上湯山村字末ニ在リ危巒絶峰兀トシテ對峙シ鬱蒼
タル老樹ハ岩際ニ蟠屈ス水其間ヲ貫流シ急湍愈激シテ深淵ニ
落チ其響百雷ノ墜ルカ如ク又以テ人語ヲ交ユルヲ得ス實ニ其
ノ奇拔謂フ可ラス而シテ三伏ノ候ト雖モ寸毫ノ減水ヲ見ス幽
ヲ探リ奇ヲ愛スル韻人騷客ノ常ニ曳杖スル地ニシテ幽邃絶雅
ノ一大勝境ナリ又少シク下流ニ山太郎淵(中藏淵)ナルモノアリ
ト云フ

菊ヶ森

菊ヶ森ハ三吉長門守ナル者ノ古城趾ニシテ湯山村字食場ニ在
リ舊井及練馬場ノ蹤跡今尙存セリ

奥之城

温泉郡桑原村大字東野ニ在ル古城趾ニシテ河野某命ヲ此所ニ
落シヌ後チ村民小社ヲ營ミ其靈ヲ齋ヒ祀リテ奥之城八幡ト稱
ヘリ

石手川 一名寶川

温泉郡湯山村水ヶ峠ニ發源シ西南ニ流レ松山城ノ南ヲ繞リテ
和氣温泉伊豫ノ三郡ヲ落渚シ重信川ト合シ伊豫郡垣生村ニ至
リテ海ニ注ク長サ八里餘大ニ灌溉ニ便ナリ

竹之宮地藏尊

温泉郡道後村大字持田佛海山西龍寺内ニ安置スル竹之宮地藏
尊ハ定朝ノ作ニシテ京師壬生寺ノ地藏菩薩ト一体分身ノ靈像

ナリ昔時人皇七代 孝靈天皇ノ末裔河野氏ノ一族ニ竹之宮官
主ナル者アリ或時其ノ居邸ノ坤位ニ當リ一線ノ光輝ヲ發ス斯
ノ如キモノ夜々ナリケレハ官主奇異ノ想ヲナシ其ノ地ヲ掘ラ
セケルニ果シテ地藏菩薩ノ石像ヲ出ス依テ一字ノ堂ヲ營ンテ
此ニ之ヲ安置ス云々又一書ニ云フ其頃偶官主ノ室娠メリ其ノ
安産ヲ祈リ且貧乳ナリシカハ多汁ナラントヲ願ヒシニ兩ナ
カラ其靈驗新ニアリケレハ其度毎灸豆揚枝等ヲ供ヘ奉リケル
ト今ニシテ尙詣者ノ之ヲ捧クル者アリ

月之輪田 一名一步田

道後村大字持田西龍寺ノ北一小路ヲ隔ツル耕地之ヲ月之輪田
ト云フ此田タル古ハ插秧ノ時汚濁中一團清澄恰モ月輪ノ如キ
象ヲ呈セシト

宇佐八幡社

道後村字中井手ニ在リテ祭神ハ 應神天皇ナリ此地ハモト松
柏繁茂ナシ一小林ヲナシタリ然レトモ一旦伊佐爾波神社ニ合
祀シタル際樹木ヲ伐採シ近來再ヒ建築シタルニ付新社ノ景況
ヲ爲ス惜ム可シ

東照院市隱軒

道後公園外濠ノ西ニ在リ本尊ハ觀世音菩薩春日ノ作ト云フ河野
彈正少弼通直ノ室綾子(河野利部大輔通秋之女)ノ開基ナリ初メ天文十三年二
月七日通直入道シテ龍穗寺殿ト稱シ温泉ノ北陵ニ閑居ス綾子
モ亦同シク剃髮シ月海智印禪尼ト號シ今ノ所ニ一字ヲ建テ閑
居スルコト二十有九年ニシテ遷化ス實ニ天正元年十月十八日
ナリ今寺中ニ五輪塔アリ即チ智印禪尼ノ墓ナリ

三光田

道後村字今市北側ニ在リ古ハ毎年插秧ノ時一團清澄恰モ日月

星ノ如キ象ヲ呈セシカハ農民等此ノ地ヲ耕作スルヲ憚リシト
又一時ハ修驗者ノ居宅トナリ居リシト云フ

勅使橋 轟橋又湯川小橋無漏橋

和氣郡御幸村大字山越長建寺門前ノ流ニ斜ニ架シタル小碓ナ
リ長一丈六尺幅八尺六寸往昔橋主計頭ト稱スル者 勅使トシ
テ 十六日櫻へ參向ノ時此所ニテ車ヲ駐メシ處ナリ故ニ勅使
橋ノ名アリ

天臨山龍穩寺

和氣郡御幸村山越ノ山腹ニ在リ抑モ當寺ハ河野家累代ノ香花
院ニシテ彈正少弼通直ノ開基ナリ通直天文十三年二月七日入
道シテ自ラ龍穩寺ト號シ道後溫泉ノ北陵ニ梵刹ヲ構ヘテ居ル
後年今ノ處ニ移轉ス舊幕時代ハ所謂錄處ニシテ伊豫國曹洞禪
寺二十六寺ヲ支配ス當時ノ什寶ニハ

蜀江錦之袈裟

紺紙金泥之法華經 八軸 光明皇后(聖武天皇之皇后)之御筆

紺紙金泥之金剛經 一軸 宮内權少輔藤原俊信之筆

龍穩寺殿(河野通信)之像 一幅 自書

天德寺殿(河野通宣)之像 一幅 自書

日勢院殿(河野通賢)之像 一幅 自書

釋迦文珠普賢之像 三幅 兆殿司之筆

十六羅漢年德尊神之像 二幅 河野通宣之筆

出山釋迦之像 一幅 狩野古法眼元信之筆

文珠大師 一幅 清原氏女雷信之筆

龍頭觀音之像 一幅 梶友之筆

等其他尙多クアリ又境内ニハ河野家數代ノ墓碑存ス

雙頭蓮

御幸村大字山越龍穩寺本堂ノ後ヘニ一小蓮池アリ何時ノ頃ニ
カアリケン一莖雙頭ノ花ヲ着ク時ノ住侶之ヲ 天皇ニ捧呈シ
ケレハ 陛下珍奇ニ聞食サレ忝クモ卿相ニ詩歌ヲ贈與セヨト
勅命アリシカハ前中納言重豐卿以下十人各自短冊ヲ寄贈アリ
タリト

十六日櫻 (車返ノ坂)

和氣郡御幸村大字山越龍穩寺ノ境内北ノ溪ニ在リ往昔此山ニ
花ヲ愛スル一老翁アリ病ヲ死ニ瀕ス其子ニ告テ曰ク吾レ年既
ニ八秩死モ亦遺憾ナシ只今春花時ニ及フ能ハサルヲ如何セン
ト歎息シテ熄マス其子此樹ノ下ニ至リ懇ロニ其意ヲ陳フ猶人
ニ訴フルカ如クス明日人アリ告ク櫻花開ケテ爛熳タリト乃チ
翁ヲ扶ケテ是ヲ觀セシム翁見テ感歎數刻ニシテ瞑ス實ニ正月
十六日ナリ嗚呼草木心ナシト雖モ其孝子ノ至誠ニ感應スルコ

ト響ノ如シ誠ニ奇異ト謂フヘキナリ今ニ至テ陰曆正月十六日
霜雪ノ中必ス花ヲ着ク故ニ世人之ヲ十六日櫻ト云ヒ且ツ老人
櫻ト呼ヒ愛翫措カス毎歲此日文人墨客多ク樹下ニ會シテ之レ
ヲ賞ス又同日ハ踏歌節會ノ當日ナレハ節會櫻トモ稱フ而シテ
忝クモ 舒明天皇道後温湯行宮ヨリ此花ヲ叡覽ノタメ行幸ア
リシニ偶々此花開カス空シク 還幸アラン時俄ニ花ノ開ケタ
リト奏聞アリケレハ即チ 御輦ヲ返ヘサセラル依テ櫻樹ヨリ
西ニ下ル坂ヲ車返ノ坂ト云フ又天德ノ昔橘主計頭ナル者勅語
ヲ蒙リ 勅使ニ下ラレシコトモアリタリ

萬歲山千秋寺

御幸村大字山越ニ在リ黄檗禪宗ニシテ貞享年間千呆和尚ノ開
基ナリ舊藩主松平定直公ノ建立ニシテ本尊ハ釋迦如來印觀ノ
作ト云フ境内大樹多ク堂宇ノ建築樓閣ノ構造庭園ノ風致等山

城國宇治黃檗山ヲ模シ山門ニ入レハ恰モ支那國ノ觀ヲナセシガ今ハ殆ント壞頽ス什物ニハ涅槃像及ヒ達摩像(河レモ唐レ畫)ノ幅等アリ

愛宕山御幸寺

當寺ハ河野大法師ノ古城趾ニシテ御幸村大字山越ニ在リ寶德三年犬法師此ノ所ニテ戰死セシカハ後其ノ靈ヲ祭リテ三木明神トハ名ケシナリ麓ニ一小寺アリ御幸寺ト云フ抑モ此ノ地ハ往古 舒明天皇ノ道後溫泉ヘ 行幸アラセラレシ時ノ 行在所ナレバ斯ク稱スルナリ

萬松山龍泰寺

御幸村大字山越ニ在リ往昔天正二年八月本縣東宇和郡魚成城龍澤寺立屋禪師ノ開創ナリ爾來天明二年當時十五代文明禪師ノ發願ニ凭リ五百羅漢ノ尊像全體ヲ安置セリ近郷ノ緇素四國

巡拜ノ道俗賽スルモノ頻々タリ殊ニ又天台宗中興ノ高僧壇那大僧正恐レ多クモ宮中ノ御歸依ニヨツテ一刀三禮ニテ彫刻セラレタル十一面觀世音ノ尊像ヲ安置セリ該寶龕ハ京師ノ大佛師竹ノ内右門尉ノ製造ニ成ル美麗結構ナルモ惜哉堂舍廢壞シテ今ハ本堂ノ一隅ニ安置セリ

客天滿宮 飛梅山圓盛寺

御幸村大字祝谷ニ在リ相傳フ菅公筑紫左遷ノ途次風浪ノ爲メ上陸アリテ暫時滞在アリシ垂跡ノ地ナリ故ニ之レヲ客天神トハ稱ヘシナリト後明德四年ニ至リ河野通能當寺ヲ再建シ其後加藤嘉明朝鮮出陣ノ際更ニ堂宇ヲ増築セラレヌ次テ松平少將定行公ノ封ニ此ノ國ニ就クヤ上杉謙信ノ秘藏セシ摩利支天ノ木像並ニ飛梅天神ノ畫像一幅ヲ寄附セラレシ爾來梅花山ヲ飛梅山ト改ム明治四十三年同大字松山神社ニ合祀セララル

祝谷山常信寺

當山ハ松山城主松平定行公本城ノ良ニ方ルヲ以テ平安ノ比叡東武ノ東叡ニ擬シテ天台宗ノ寺院ヲ設立シ鬼門ノ鎮守ト爲ス又當寺ニハ少將定行公ノ遺骸ヲ葬リ廟ヲ眞常院殿ト號ス

東照宮 (松山神社)

御幸村大字祝谷常信寺山内ニ在リ當宮ハ松山城主松平少將定行公ノ勸請ニテ當時宮殿ノ結構ヲ計畫スト雖モ幕府ノ許可ヲ得ス依テ私ニ神廟ヲ營ミ歲時祭典ヲ怠ラサリシカ同宮二百五十年ノ神忌ニ先チ大ニ土工ヲ起シ三年ニシテ神廟盡ク成ル經營最モ華麗ヲ極ム

薄墨櫻

温泉郡伊臺村下伊臺西法寺ノ境内ニ一大櫻樹ノアルアリ名クルニ薄墨ヲ以テス相傳フ 天武帝白鳳九年 后病アリ當寺ノ

藥師如來ニ御祈願アリテ其癒ユルノ後天皇倫旨ヲ下シ給ヒシヨリ斯ク名クルト雖モ傳記ノ詳カナルモノナシ

振鷺園

温泉場東ノ丘ニ在リ明治二十五年浴場改築ニ際シ温泉ノ碑ヲ茲ニ徙スヤ大ニ艸菜ヲ拓キテ新ニ花樹ヲ種植シ遠ク溪水ヲ引キ三五ノ亭子ヲ構ヘ以テ浴後散策ノ地トナス

道後ハ勝

温泉樓	月	靈之石	陽炎	振鷺園	雪
圓滿寺	蛙	輿谷	鶯	鴉溪	納涼
冠山	郭公	放生池	蓮		

道後十六谷

石切谷	義盛寺谷	圓滿寺谷	木谷
柳谷	細見谷	鴉谷	法雲寺谷

櫻谷
大堂谷
鷺谷
立石谷
奧谷
柿之木谷
湯月谷

八十四

大正二年六月廿四日印刷
大正二年六月三十日發行

道後溫泉事務所

愛媛縣溫泉郡道後湯之町
甲千四百六拾番地

發行兼編輯者 橘 欽也

同縣松山市榎町拾壹番戶

印刷者 岡野音彌

同所

印刷所 松山向陽社



139
236

終